



西國三十三所名所圖會 五







三十三所名所圖會卷之四目錄

和泉國續

第四番卷尾山施福寺

本堂 摩訶堂 護摩堂 經藏 寶庫 卷尾社  
智惠水 捨身嶽 德水 護摩窟  
卒都波本 免卒嶽 如法峯  
大日堂 大門 卒都波本 免卒嶽 如法峯  
馬頭窟 吉祥院 蹟 満願寺 蹟  
吉祥院 蹟 満願寺 蹟  
網加水 龜石 千手滝  
不動窟 四寸岩 網加水 龜石 千手滝  
清水滝 増地窟 馬頭窟 吉祥院 蹟 満願寺 蹟  
音無川 女夫淵  
満願寺 龍 佛具窟 不動窟 四寸岩 網加水 龜石 千手滝

河内國

國號之譯

天野山金剛寺

金堂 食堂 五佛堂 網加井 觀月亭 護摩堂 求聞持堂

後村上帝行宮

天野川

上原八幡宮

天野山

仲哀天皇陵

烏帽子形古城

上原八幡宮

仲哀帝宮

延命寺

本堂 護摩堂 鎮守社

觀心寺

三日市驛

楠首墳

七星降臨所 弁天司 網加井 祀拜石

實惠廟 本願院

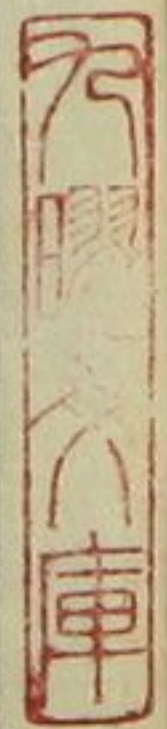
地蔵堂 訶梨帝母社 獨鈷玉井

後村上天皇陵

當山

中院什宝

惣門





八幡宮  
 諸越橋  
 龍泉寺  
 明王寺  
 富田林  
 名産新堂篋  
 利雁神社  
 輕大臣墓  
 野中神祠  
 滿願寺  
 第五番紫雲山  
 加盛古趾  
 付宝大畧  
 善光寺

咸古佐備神社  
 金胎寺城趾  
 觀音堂 鎮守社 龍王祠 行者堂  
 錦織山 人磨墳  
 二十山  
 興正寺懸所  
 和雨池  
 戸苾池  
 野中寺  
 埴土坂  
 仲哀天皇陵  
 葛井寺  
 葛井寺合戦  
 三好城趾  
 志疑神社  
 伴林氏神社

河合寺 櫛公碑  
 横山天神社  
 同城趾  
 千人隠  
 西條川  
 潮湧石  
 錦織神社  
 粟ヶ池  
 櫻井  
 清寧天皇陵  
 網加井 鎮守社  
 仁賢天皇陵  
 長野神社  
 羽曳山  
 瑞珣石 鐘樓 伽藍礎石  
 觀音堂 地藏堂 經藏  
 寶壽寺  
 和雨神社  
 寶海寺  
 本堂 不動堂 善薩堂 影向石  
 紫雲石燈籠 宝庫 業平屋敷趾 大門 葛井  
 本山 紫雲石燈籠 宝庫 業平屋敷趾 大門 葛井  
 本山 紫雲石燈籠 宝庫 業平屋敷趾 大門 葛井

黒田神社

允恭天皇陵

孝女衣縫氏墓

舟橋水仙





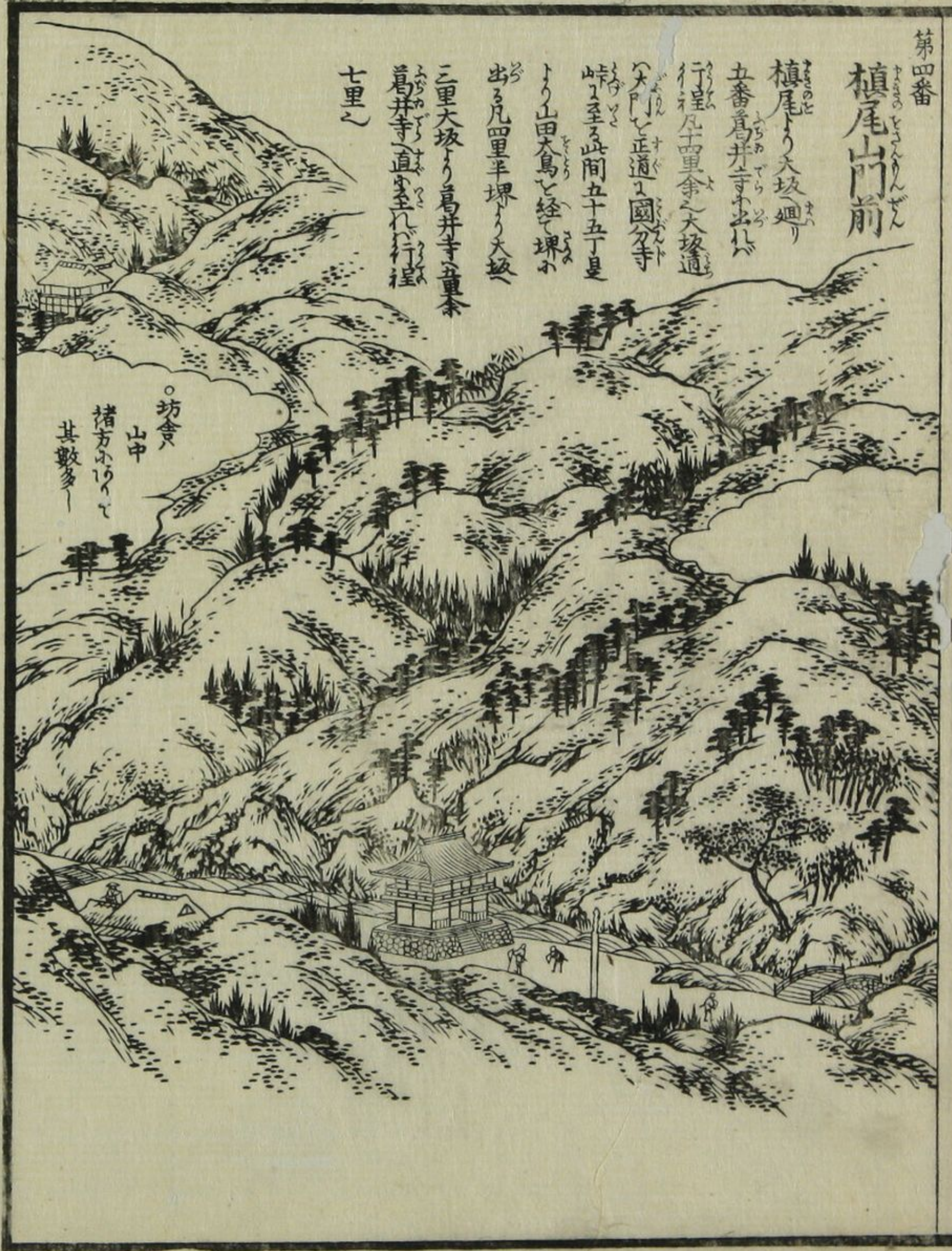
満願寺瀧

卷尾寺大門より下流有



植尾山前

植尾より大坂廻り  
 五番鳥井寺より  
 行程 全西里余大坂道  
 大門正道國分寺  
 峠に至る此間五十五里  
 より山田大鳥と経て堺へ  
 出る凡四里半より大坂  
 二里大坂より鳥井寺五里余  
 鳥井寺直まれば行程  
 七里



坊舎  
 山中  
 諸方よりて  
 其數多

去る弘化二年己三月  
 十曾の夜火火かよて  
 本堂より伽藍  
 ほとひ僧坊に至り  
 都合二十七宇及燼  
 然まとも本尊  
 といぬ観音文珠  
 其餘諸佛甚か  
 残らせのゆく最  
 難有る事いも  
 故今今再官の最中  
 われはす小園ま

どの四親  
 の光景とあつた  
 りの則ち愛染堂  
 より上の方僧坊焼  
 失する所多



水うき水所つく。





修寺  
 深山路の静けさ  
 松の尾寺  
 静かなる山



夫尾山施福寺  
おののこんせふくじ

檜原越へ紀泉河二羽の  
 界七越峠二國ヶ  
 嶽ホと経て富山  
 小至る山径  
 険隘の難行



第四番 卷尾山仙藥院施福寺

和泉國和泉郡のり 檀尾山に書て甚歎息相宗

幸申す致めて天台宗とあり 日光御門跡の屬に在り 觀音の清一師範あり 大坂より泰信の輩八坂より上石津に至り 大鳥山由野を氣と登て國分寺村の是下り 卷尾山大門にて 五十五丁本堂とて六十丁行徑凡九里此間 石津の間に所行 尚三林村の春日の神社國分寺村國分寺の同跡 光明皇后誕生の古跡光明の龍鹿の足跡岩窟藥師堂の智海大の像と云々 大坂塚より 宿願寺尋也 本尊 彌勒菩薩 長五尺 服士 文殊菩薩 長五尺 千手觀世音菩薩 長五尺 右の服女あり 四天王 觀音の前女あり 二十八部衆 堂内の柳の上あり

馬頭觀世音菩薩 本尊 彌勒佛の後堂より長凡三尺 傳云花山法皇の御願よりて安置 給ふ 御影堂 弘法大師とあり 護摩堂 不動明王とあり 經藏 一切經と藏む 寶庫 大師堂の下 卷尾神社 本堂の南上壇の地あり 當山卷尾明神とあり 鐘座あり 靈地あり

三代實錄曰清和天皇貞觀六年秋七月廿五日按和泉國正六位上卷尾之神

未聞持堂 隱室藏菩薩とあり 智惠水 本剛持堂の下道の傍に石あり 弘法大師當山水に 捨身嶽 本堂の南より 隱水 捨身嶽あり 護摩窟 同所より大師護摩と修一の所とて 今尚月二倉の續摩と云ふ

檜葉手水 弘法大師山中の水とて以て檜の葉と採て手に清めんと地土投て誓言し 若我願成 榊其餘他木檜葉と生じ 榊木より 檜葉手水とて古書に 檜葉手水とていふ 山内かもちて 檜葉手水とていふ

弘法大師剃髮回趾 石階の中間道の傍に二丁の堂ありて 愛深明王とあり 俗に愛深堂と云ふ 此地ハ 勅撰僧正より大師とのより 勅撰と師 正面愛深明王 弘法大師 勅撰僧正

御髮堂 愛深堂の上の方より 大師薙髮の里髪とて二丁け半の窟庫あり 手石櫃あり 此中 理の上小堂と建りて 故に俗に御髮堂と稱し 此地の第五番葛井寺小堂も 分道あり

大日堂 本尊大日如來 左 弘法大師 右 吉祥天女とあり 大門 樓門造りて 左右に金剛神成 平都婆峯 本堂の西下りあり 大僧正行基懺悔秘法あり 兜率嶽 本堂の北より 如法峯 觀

覺超塔 兜率たのふ有 觀超 原當國の出家とて 故に 二階岩 兜率たのふ有 清水滝 本堂の西下りあり 蠟螂窟 清水の滝の前有 馬頭窟 北室院の上の方有

吉祥院回蹟 大門の上の方山の手あり 滿願寺回蹟 大門より二丁許下あり 弘法大師 延暦年中一建のいし寺院あり 錫杖石 滿願寺の而蹟あり 行滿上人 座禪石 同所より 滿願寺籠 同所より 佛具窟 滿願寺の滝の辺に有 平基 不動窟 同峯より窟の内不動明王とあり 傳云此尊像弘法

或人此尊像と他の尊對むとて 忽ち又本の尊對せり 守岩 大門より二丁許下往來あり 故に俗に 漢岐不動後

關加水 大門より凡十五丁許下行滿谷有 龜石 大門の内手水府の 千手滝 龜石の平有 當山中 行滿上人修禪のり 古蹟あり 音無川 捨身嶽の林あり 標石と建り 此處 事あり 故に其尋安とて 余ありとて 思ふ



前後の事、張る音、甚く故、斯く、史婦淵、龍のり、山下あり

夫當山卷尾大明神鎮座の地、八峯四嶽層巒蒼翠、山中四十八の滝、千六の岩窟ありて古今希ある靈跡あり、開基、行滿上人也、傳、あれ、其時代、詳、中興山、大僧正、行基、後、弘法、大師、岩淵の、山門、勸操、小逢、く、学ぶ、始、勸操、岩淵より、此、植尾山、小、抄、住、と、故、大師も、當山に、於て、落髮、給、勸操の、住、給、所、と、中、室、院、と、号、今、尚、其、向、蹟、蹟、然、り、大師、當寺、有、て、初、の、名、と、教、海、又、如、室、と、改、む、延、暦、十、四、年、東、大、寺、の、壇、上、登、つ、て、具、足、戒、と、受、け、又、空、海、と、改、む、則、ち、當、寺、の、什、實、小、室、海、難、深、の、黒、髪、又、渡、唐、の、初、り、青、龍、寺、に、惠、果、阿、闍、梨、より、傳、來、給、真、言、秘、密、の、論、書、又、歸、朝、の、時、平、城、帝、奉、り、將、來、の、上、表、と、給、先、後、鳥、羽、院、の、院、宣、後、堀、川、院、の、宣、旨、あり、寺、田、免、除、の、證、文、あり、四、條、院、延、應、年、中、の、横、山、の、邸、と、以、て、灌、頂、此、用、途、と、て、仁、治、元、年、小、灌、頂、堂、を、建、給、後、深、草、院、建、長、二、年、小、前、大、僧、正、行、遍、と、結、縁、の、灌、頂、と、修、給、同、二、年、小、宣、花、門、院、に、御、願、り、つ、て、萬、花、萬、燈、會、と、行、り、其、用、途、と、て、吉、見、の、免、田、と、配、せ、る

同門院、卷尾、寺、に、見、十、八、の、伏、見、の、御、所、あり、て、五、雙、花、童、番、と、勤、め、む、御、見、聞、衆、小、鷹、司、女、院、近、衛、殿、下、兼、經、公、あり、正、嘉、の、頃、小、後、深、草、院、法、華、經、と、寄、附、給、小、是、後、白、河、院、常、小、讀、誦、給、所、の、經、書、り、金、銅、の、阿、字、同、愛、深、明、王、并、小、種子、十、鉢、同、普、賢、像、不、動、尊、佛、舍、利、三、粒、寶、塔、小、籠、ら、ま、當、山、小、收、め、給、又、弘、法、大、師、より、傳、教、大、師、に、贈、り、書、一、通、も、に、當、寺、の、寶、庫、小、秘、藏、に、尚、其、余、靈、佛、什、寶、舉、て、投、じ、り、ま、往、古、大、伽、藍、と、て、寺、領、も、許、す、あり、と、聞、古、延、喜、主、祝、式、曰、和、泉、國、卷、尾、山、寺、觀、音、堂、料、五、百、束、と、當、時、ハ、坊、舍、七、十、宇、あり、て、免、除、の、租、稅、絶、小、石、然、ま、も、山、林、若、干、廣、く、て、樹、木、繁、茂、せ、り、是、と、農、商、小、驚、び、て、益、を、一、又、一、の、坊、中、順、禮、の、徒、小、宿、と、し、二、助、の、故、小、麓、の、花、咲、初、頃、より、諸、人、群、衆、と、最、興、一、旅、人、此、宿、に、坊、舍、何、も、清、潔、な、れ、世、塵、と、拂、ひ、て、實、小、心、に、穢、も、洗、ふ、思、ひ、せ、り、  
修正會、例、年、十、二、月、廿、日、の、夜、より、六、日、の、夜、至、翌、正、月、元、日、より、七、日、を、一、山、の、僧、侶、懺、法、修、行、あり、毎、夜、智、恵、水、の、辺、小、炬、火、と、焚、て、あ、ま、と、勤、め、又、本、堂、及、び、卷、尾、明、神、と、拜、殿、外、陣、の、儀、式、者、  
開山會、例、年、八、月、五、日、修、行、の、り、行、滿、上、人、の、法、事、あり、  
神供會、例、年、十、月、五、日、より、十、日、を、一、山、の、僧、侶、修、法、の、り、十八、日、の、夜、觀、音、影、向、の、り、由、言、傳、此、項、か、る、の、風、雨、烈、俗、不、是、と、前、三、後、の、龍、と、号、以、前、三、後、一、日、の、内、雨、降、ら、ぬ、事、あり、と、云

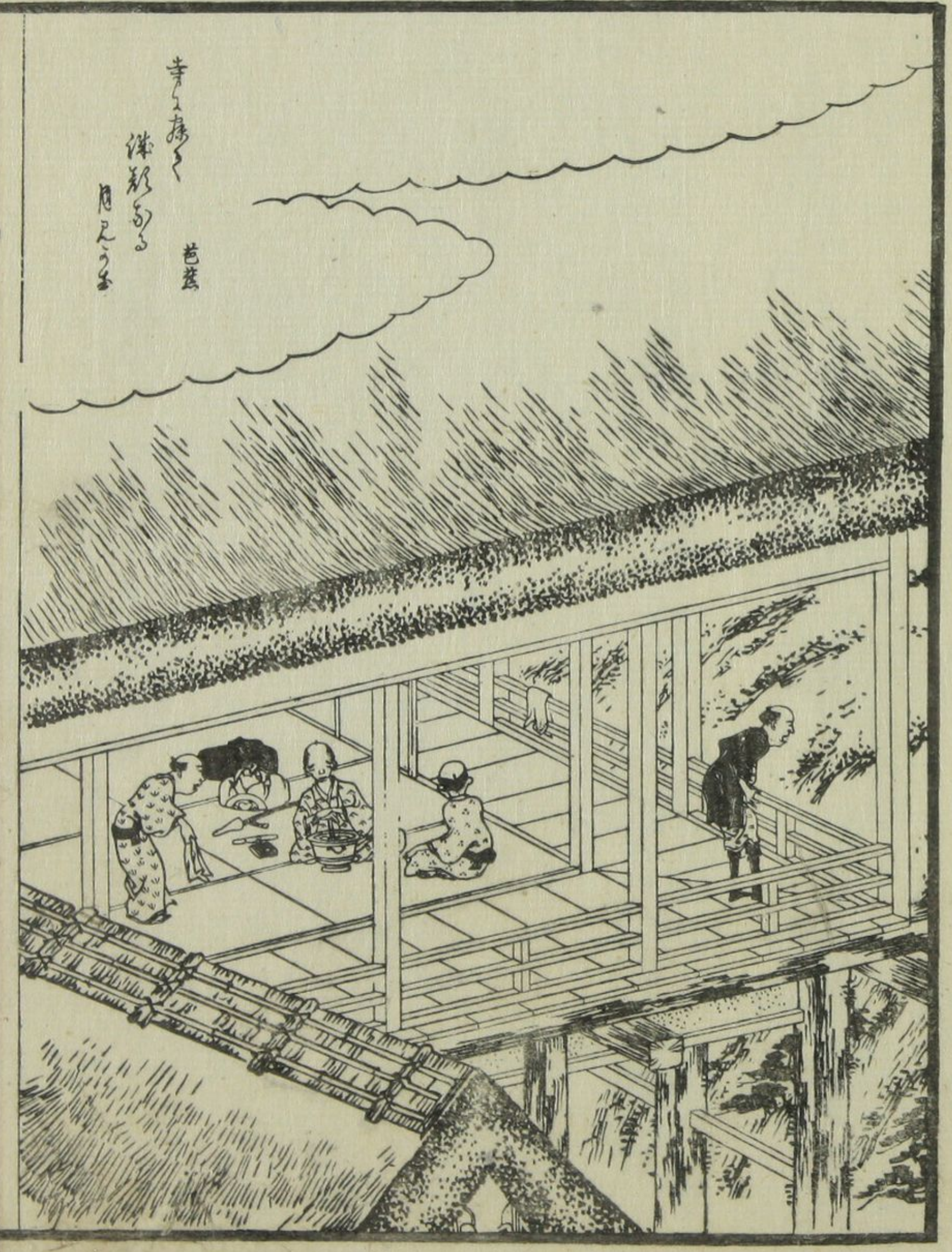


榎尾山坊舎

當山和泉國中第一の高山にて  
 路遠くして雲封の山の出るこ  
 運和泉の方より登るハ  
 漢川と右に左して道  
 披くハ後山より河内路ハ  
 下るハ山路細うて嶮難石  
 と車歩行と脚煩ハ  
 是と煩道といハ  
 一山の坊中つゞきハ  
 屋上ハ瓦と用ひハ茅と  
 りつと青りたるハ  
 瓦と用ひハ土庫ハ  
 重移り葺と覆ハ  
 是寒氣強ハ  
 瓦と礎ハ故ハ



寺々あり  
 月見堂







法海上人千手大悲  
の靈驗のあらむ

傳云後小角法花經廿八品と分り諸國此名山納む當山小不輕品と納めり故小  
如法ヶ峯と号し又當山弥勒菩薩と本尊と眼士馬頭觀音と安置は然  
行基の弟子法海上人靈驗と感し千手大悲托尊像と自ら彫刻とる所とぞ  
按小今本尊の後堂小馬頭觀音の靈像と安置は是則ち傳言の所とぞ  
觀音靈湯記云盥囊鈔曰西國卅三所第四番施福寺の千手八和泉國和泉郡小  
つう是欽明天皇の御願行滿上人の建立三間四面の堂也ト云愚按る小大凡本朝  
小佛法の傳來せし事ハ欽明帝乃御宇始めて渡つて未と専ら行はれ豈勅願  
所あらん名此時獲我橋目始めて向為寺と建つ是あん吾朝寺院の始るる之と除  
て未と曾と寺の事と聞ば行滿上人も恐らくハ後世の人あらん未と傳記と詳  
くせば中興山行基及び空海小過ぐハ弘法大師勅操僧正と師と當山  
とて剃髪し給ひ也延暦年中滿願寺と建自ら千手大悲の像と彫刻安置  
し給ひ又再び來つて求聞持の法と修し給ふ故小當山小捨身巖隱水等つう皆弘  
法の遺跡也ト云



一説小住昔法海上人當山小居住の時何國とも去るに賤し客僧一人来りて  
一夏九旬の間當山小事へんことを願ふ上人果して許さず客僧は此日よりして  
菜と摘み水と汲み薪と採りて勤る最誠實なり其上堂塔と掃除し夜は終夜  
寐りて勤行怠る事あり山の僧侶も奇異に思ひては其生國姓名を尋ねま  
とも曾て覚へばと尋ね然る小夏も満れば稍て暇を告ぐ且故郷も遠くをバ耶路  
錢を賜はれ精しく小寺僧吝惜して是と譽へ返つて不實小罵りあるを傳情  
ら尤其頃小寺領も許是の坊中何をも富むる唯榮耀栄花小誇りて慈  
悲の心も僧体も有る出家の行状もありて斯て客僧は爲方り夫より本  
堂に椽一上りて大音一罵り搦りて笑止や斯る尊に山もまも實の出家一個もあ  
慳貪邪見の惡業を千事凡俗も劣る見少く稍て此六伽藍廢して惡魔外  
道の住家とらん心必く思ひ知て南とて出行けり其声法海上人の耳も  
響り聞へる是凡事も彼僧と呼せし有れば若僧のりも去り其跡と  
追かると彼僧は小羊町より先不見ゆると下も更に追付事ありて終に紀

街道大津といへる海辺まで追鬼は彼僧は海上で安くと平地を歩むが如く行くと  
小追人の僧徒あまれと岸を彷徨忙然たり終に其影も不見に成りまは皆  
立ちりて如此の由と語る小上人も嘆息し諸人を人として有るを  
正しく御佛の化身とて斯てや有るを急げ同御信と言て彼を對ひ  
て上人は一山の僧徒一心我が罪と許せしめて今一回御姿を現しをせし信  
心渴仰もなれ其時雲中小觀世音のりりれの微妙の御声にて曰く我は是實陀  
洛山の教主千手觀音なり一山の衆僧佛道法義を忘却邪見放逸するが故に  
教示からんが爲に假し卑し一身とらうて一夏の間凡俗の業をか貪りたる者の  
難苦を見せしむる富貴小すせそ慈悲とまは出家此行状を失ひて欲の紫  
迷つて夫出家の道に無欲無我して慈悲を専らに衆生濟度と心にす下寺中  
此僧徒吝惜して愛慾の心なく慳貪邪見して只己と富栄人事と主とするは  
何ぞぞや佛に無念無想して苦悩のがれ厭離穢土の安心を衆生小すも依  
止淨土の起行を専らに然る心も自ら空寂して己心の弥陀小ら



より娑婆即寂光浄土の悟道も自然に開くはのちや向後心と改め修行息ら  
に佛法修行せよと最深切示しめて南とて飛去る上人今も許きの僧侶一  
時小夢の覺るごとく先非と悔と感涙と流しおと救をせんとて地小平伏て拜  
りかく臣程小上人の僧に對ひ今日より心と更め永く法義と勤め本尊と守  
り奉るべしと則ち視下給ふ千手觀音の尊躰と彫刻し本尊の右邊小安置  
奉りし是今の千手大慈悲尊像と聞也

又云此尊像開眼供報終る其夜より赤尾山より光明赫々として留白晝に如  
ありしと遠近の老若奇異の思ひと曰く赤尾山小登りて拜奉る小此觀音此  
御身より光明と放ちるありしと實小正眞の觀世音ありしと尊信せらる  
るありしとと南海小視下給ふ故小南面小安置せり世人南向け千手や身は  
觀音靈驗記真鈔曰く旗尾寺千手觀音の像或昔法界阿闍梨新く出現と  
蒙り其下り 光仁天皇の敕聞小達し則寶龜二年四月十八日より同七月十日  
に至りて佛子闍梨と心と合せて大慈悲像成就しちんね故小此觀音の精舎

建立 光仁天皇の御后にも申奉るる南海に現し給ふ故小俗に南向け千手觀音  
しんふありしと又本尊弥勒の像 聖武天皇の御願主として作ら給ふも云  
詠哥 深山路や檜松原より多往に植の尾寺り駒ぞつとむる

按小山中檜松杉多茂し殊更第二番杉川寺より當山小至ると檜松越しといひて  
頗る難所の深山路より植と牧しよりはて駒と次けちるる牧ハ駒と放ち類と地  
一説小此歌ハ心性の駒といふ意と詠せりあり漢書魏豹が傳し人生白駒の隙成  
過る如しと云又諸経論小心と猿と馬と喻ふ事あり或哥小

予まか悪道にも入ねど意の駒し手綱ゆるま邪  
然も深山路ハ無明より檜松原ハ凡俗平生に眼に見意小思ふ煩惱男女乃  
愛執恰も深山に諸木に繁る如か悪業の身なれども佛の教と力と  
し煩惱の檜松原と押分りてた佛場に至る心の駒ハ勇と悦ぶと詠  
とも云ふ都て馬小二箇の半綱五箇に鞍陰陽の鞭かどつと大事り皆佛の  
教誡し同く深と道りる者乎喻乘馬ハ傳授の通し騎人の意し任は是貴に





卷尾山  
 修正會  
 十二月晦日の夜より  
 正月六日の夜まで



四  
 乙



人の如く又小荷駄の賤し馬の秘事も大事も辨へざれば唯我の身一心念佛  
 の鞭を以て意の駒と善行のつるすべしと也

當山より第五番河内國葛井寺に至る正道行程凡七里余

大門と出て直に行ハ湖大坂道あり右の方へ行ハ天野山小至りて五番道より先

植尾山大門より七曲と過る善正村南面利村浅経と千石坂小至る此峠は和

泉河内の界なり是より天野へ出て富田林小至る夫より喜志村西へ浦村と

過る五番葛井寺小詣り是正道此順路あり

燈明松 善正村の山中より岩南より潮谷あり又隣村福瀬村の山中にも此事あり

土人傳云例奉正月元旦此松樹の枝に燈明かゝり敬小斯ハ号なり然れども知識の

徳の公の事なり是を見る事なり此松を願大樹として枝葉四面小繁茂に

潮谷 善正村の山中より岩南より潮谷あり又隣村福瀬村の山中にも此事あり

南面利の湯 山より下り鳥の地獄といひて湯あり平主より下り湯吹あり此水とのり

病者の者ありて此水とて湯に病者にとりて入浴せむもかゝる病の強ありて快氣するものなり

燈明松

家集  
ぬるるるねは  
かゝるるる  
うらうらと  
しんせ



家集  
松の音あり  
きんきん  
しんせ  
流乃ついでや  
まのりて年





鳥地獄



此の事遠くより追々入湯来る所の地をく終つて一箇の嶽生野と云ふ所を  
 按じらふ其水温泉といふ所の水も下より沸く湯と増は減する形勢全く硫黄の氣の柔弱なる者  
 ありんか山中の草木繁茂せりといふ事知るべし

五雜俎云大凡温泉の發源其下より必く朱砂  
 或は硫黄礬石なり蓋天地至陽の精の結ぶ所なり其  
 氣甚く熱いと黄じて酢也ぐぐり芥ありあり  
 且も浴して輒ら愈む竹木と浸り事二宿れば  
 則終つて蟲は蓋硫黄能諸虫と殺せり



千石坂

此峰、河泉兩國の郡界、向く河内、錦部郡、是とて天野山金剛寺に至る行程凡十八余

河内

河内國、大管十五郡、其地形、東南に山、帯び西低、池沼水田多、西乃方、剛とて海風常、入る、國人も溫和、て風俗、亦あり、原、大河内、と号

其事古事記、わび國造本紀、に見、る、姓氏錄、凡河内、は、是、同、延喜民部式、凡諸國部内郡里等、名並用、二字、必取嘉名、是、是、り、て、初、一字、と省、き、今、の、如、く、河内、は、名、義、大和國、都、り、り、時、山城、の、大河、の、此、方、は、國、を、大、河内、と、い、ひ、古事記傳、見、又、河内志、も、皇都、和州、は、大河、西北、に、繞、周、と、以、て、号、く、見、へ、る、將、幾、内、志、は、名、柄、川、と、後、て、中、津、川、乃、水路、と、塞、ぐ、之、の、後、續、日本紀、聖武天皇、の、卷、は、河内、と、攝、津、と、河、堤、と、争、ひ、事、と、記、さ、る、尚、桓、武、天皇、の、卷、は、河内、攝、津、兩、國、の、界、は、川、と、堀、と、堤、と、流、れ、荒、陵、の、南、に、河内、川、と、導、り、西、は、海、と、通、り、む、ち、の、國、名、風、土、記、曰、河内、國、神、武、天、皇、の、御、宇、銀、河、に、迂、り、給、ふ、其、内、の、國、を、大、河内、と、号、ひ、あり、天、の、川、と、号、る、所、今、交、野、郡、に、あり、ト、云、ふ、は、河内、と、云、ふ、川、より、負、一、名、ある、事、明、ら、く

凡て當國

東南高く西北低、  
萬水南より西北に流る故、  
土人南と上、北と下、の、  
風俗素樸淳厚、て奢靡、と好、ま、  
稼穡と力り、尚、古、の、風、を、存、し、婦、  
綿布と織、と恒、産、は、是、と、世、に、河内、  
水綿、と、織、と、則、ち、河内、綿、と、の、地、性、  
頗、る、強、く、所、謂、土、地、の、名、物、あり





和漢二才圖會曰養老四年堅下堅上二郡更爲大縣郡又以丹治二郡今爲丹南丹北云  
天野山金剛寺二寶院 河内国錦部郡天野あり真言宗僧舎七十宇

金堂 大日如來 長八尺 脇士 不動明王 右 降三世明王 長各五尺五寸 同作

食堂 女珠菩薩 長三尺五寸運慶の作 堂内小寶頭盧尊者と安ん同作

多寶塔 大日如來 長三尺五寸此堂内延元年中後村上帝行宮より入 春日佛師の作塔中四面の鏡板雲龍の画狩野大炊助益信の筆と

藥師堂 伊寶塔の傍上段の地より本尊藥師佛八行基僧正の作 長五尺 日光月光十二神將と安ん

求聞持堂 西の方上段の地より 本尊虚空藏菩薩と安ん 弘法大師の作 此堂内女人結界也

五佛堂 藥師堂の北より 五智如來と安ん 春日佛師の作より二寶院より号い 堂内 東照太神君の尊影と安置奉る

關伽井 五佛堂の奥より弘法大師加持水より靈泉甘美なり云

觀月亭 五佛堂の北より後村上天皇月見の御殿より今尚唐破風の御殿造りあり 又五佛堂より廊下あり弘法大師の影と安ん 真如去親王の筆

護摩堂 脇士不動明王愛深明王運慶の作俗御影堂と云 西室金輪佛項尊の像ハ 貞享年中 桂昌院殿の御寄附あり

關山堂 御影堂の北より本尊不動尊 脇士大日如來 藥師如來共奉行基の作 阿觀僧正覺心法印の廟塔あり

持明院法皇塔 關山堂の上より 入壬九十六代の帝光嚴院と諡奉る 南の方池の向あり 天照太神 弁財天 善女龍王の三前と祀る

鎮守三社 東向毘沙門持國の二天と安ん 運慶の作 長八尺五寸 額 金剛寺 後白河法皇の宸翰あり

樓門 樓門の東山腰より丹生高野水分の三神と係せり 鳥居拜殿石階亦嚴重なり

丹生明神社 又半途へ蛭子祠 孔雀明王祠あり 拜殿の左上の方より建長四年十月廿七日最明寺時頼入道の寄附也

鐘樓 往還の傍より即ち此鳥居の前通南より来る道とて表屋の街道より鳥居の向より構 待の茶軒あり

鳥居 十二面觀世音と安ん 春日佛師の作 當山集會所滿願院あり

觀音堂 東向金剛力士の二王と安ん 弘法大師の作 長九尺五寸

惣門 寺紀云

夫當山葛城の崇岡古佛轉輪の聖跡河育王鐵塔奉収の靈域とて僧正行基早 剗り厥后弘法大師密法修行ニ密瑜珈の淨懺とて小星霜累々四百歳と歷

たふ小聖跡太荒廢れ 後白河院御宇永元九年紀の南山の沙門阿觀ある夜高野 明神夢靈告あり河内國天野澤に往て廢蹟と興とて阿觀ありと瑞とて

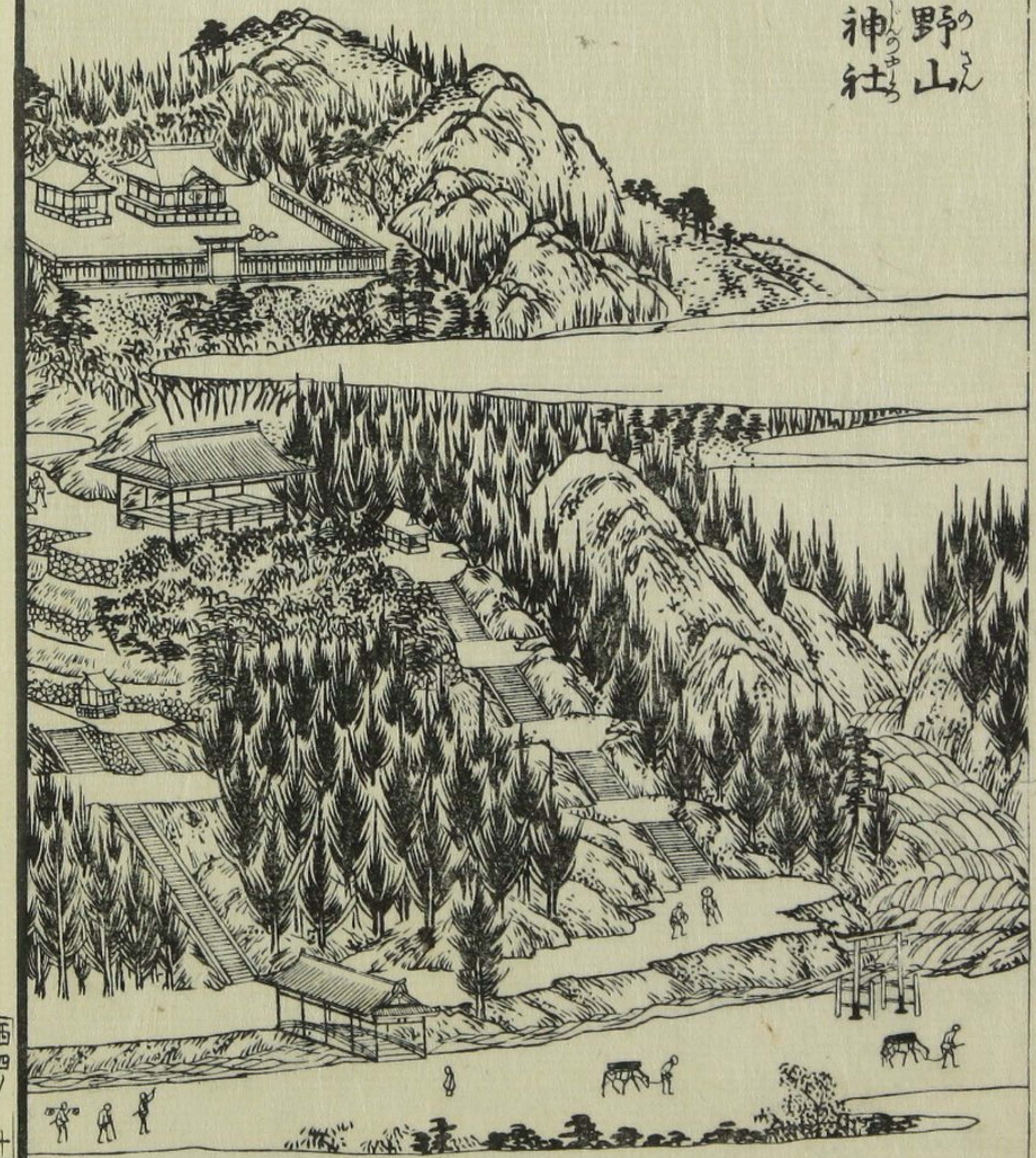
即ち鑿と飛し此山に至る一箇の藪澤と見え小異人岩上と踞踞阿觀のり是は何人



神杉や  
 幸れけよ  
 見  
 秋は  
 我足  
 夕三也  
 藤也  
 流  
 神  
 乙由



天野山  
 三神社





くや、務答く我、建水方の神天野の澤、搦り阿観よりこんで霊夢し今の示現  
と符合とま、務霞ふりて行方は因茲貞隆の志願厚して鳳城一奏以  
後、白河法皇親心浅く、貞安九年の春高屋朝臣憲貞お詔して再宮の、即ち金堂  
食堂御影堂の諸伽藍悉く成就し又佛舍利と賜てあり安し又嵯峨帝は第二の皇子  
真如法親王の深きを給ふ私法大師は圖画と御影堂を安し丹生水方の神祠と建て鎮護し  
後、白河院の勝と賜て右大將頼朝郷の御教書建久二年八條女院牒と下り僧坊二綱七十餘  
坊と造らり、同二年石川判官代源義兼寺領國役諸役雜事永く免除すべし院宣と  
給へ、後、白河法皇再建の由致と以て第二の皇子守覺法親王の裔寺とあり建保二年  
七月嘉陽門院故一條女院の芳信と感へ舊風と繼て女人の高野と修号し、の正和二年  
学頭阿闍梨心實當山の瑞光と見て阿育大王の鐵塔と感得し古佛聖跡と事奉ふ  
知りまゝ、即ち其出現の所と今塔の尾より元弘二年二品兵部親王大塔宮の令旨に  
賜て播州西河庄と祈禱の用費と給へ、建武二年十二月、後醍醐帝鳳詔と下り  
東寺傳來の佛舍利九粒と當山お収めり、延元元年十月、勅願寺と成南朝正七年

北朝の三上皇當宗行幸同年八月持明院の上皇學頭禪惠法印と戒師と、同九年南  
帝は皇居と當山移し伽藍食堂と常御殿とは楠左衛門尉正儀和泉守正武の英  
雄皇居と守護し奉り、天野殿と稱し、同十年南帝の微君僧徒と勅して音楽と傳授  
あり、の有銘の梁塵と寄附し法會と潤色し、の同十年持明院法皇御灌頂志  
願のむらう嵯峨帝の御灌頂の時弘法大師自画の、の、昨金兩部の大曼荼羅維  
の、小遷して本尊と、又禪惠法印と以て灌頂の師と、遂に其曼陀羅と勅して當  
山に納む、後村上帝の叡聞お達し泉州大島庄攝洲山田庄と結縁灌頂の料と、  
四海清平の御修法毎年正月におまこと行り、同十五年、中興阿観と贈僧正と作  
代の聖王將軍家國司の崇敬浅く、の、

天野山什寶大畧

兩部大曼荼羅二幅、弘法大師の筆、初、禁中より、同種子曼荼羅、中興阿観僧正筆  
釋迦三尊種子、中興法皇五尼自身の鬘髮と、の、  
佛舍利、五粒、後、白河法皇當山再興の時、東寺傳來佛舍利、後村上帝御寄附、  
御寄附の繪、



天竺阿育王鐵塔 正和三年忍實上人當山塔の尾に感得のちり日本二箇の靈寶の其一あり

最勝王經 紺紙金泥 法華經開結 光明皇后御筆 大毘婆沙論 光明皇后御筆

稱讚淨土經 中時法尼筆 法華經 同筆 寶篋印陀羅尼經 明惠上人筆

念珠蓮 阿觀僧正 能作生玉一顆 弘法大師 鈴五鈷明鏡 三種同大師持物

匠塔二基 弘法大師造立 不動降之世二尊 宅磨法眼澄賀筆 阿彌陀佛 宅磨筆

釋尊 張思恭筆 法華總法像 巨勢金剛筆 同講本尊 同筆 陀羅尼呂像 北興王筆

愛深明王 真教大師筆 大威德明王 鳥羽僧正覺範筆 六觀音 阿觀僧正筆

弘法大師御廟出現像 觀賢僧正高野山奥の院御廟拜宿の時大師出現の事あり

後白河院以來代繪古院宜 二十九通

後鳥羽院建久以來繪古 十五通 大臣家文書 二通

右大將頼朝卿已來代將軍家文書 四十九通 大閻秀吉公御書 二通

楠左衛門尉正成自筆 二通 同正行正時正儀等書翰 十二通

寶劍 長二尺一寸銘 同 長九寸五分同作 此寶劍二柄も阿觀僧正持物

高麗笛一管 聖德太子 御所持 琵琶一面 銘雷神 同二面 笙一管 已上四種 後村上帝御寄附

笙一管 銘嵐丸 同一管 銘鈴丸已上二品 同一管 信貴山頼尊依

太鼓 鞆鼓 鉦鼓 以上二品 緋威鎧 楠成 古皮具足旗指物 楠家持物

山水展風一双 雪杖筆 同一双 古法眼 同一双 土佐光信女筆

能太鼓 小鼓六挺 自是以下坊中摩尼院付寶

菊水旗 菊水の紋あり又非理法意天の 秘傳兵書 二十帖

菊水太刀 鎧通刀 銀銷守刀 月山作此二品正成所持

正成木像 長壹尺五寸 長男正行彫刻

愛深明王 弘法大師筆 不動尊 妙法和尚筆 展風 一双 土佐光信筆 以上三種坊舍中院付寶也

聖德太子御影 守屋退治の尊像御自依 是坊中無量壽院の付寶也尚其外坊中付寶也

名産 柿 長くして流しあきと温湯とて製し滋味と掛け其味は頗る佳 夫野柿とて

抑當山の形勝と眺望とる小前へ流を清く後小翠の壺高く鐘聲の音白雲と和

松風の声寶閣とめり春梅香とて鶯の初音谷一研一秋高峰二月澄りて



天野山  
表門

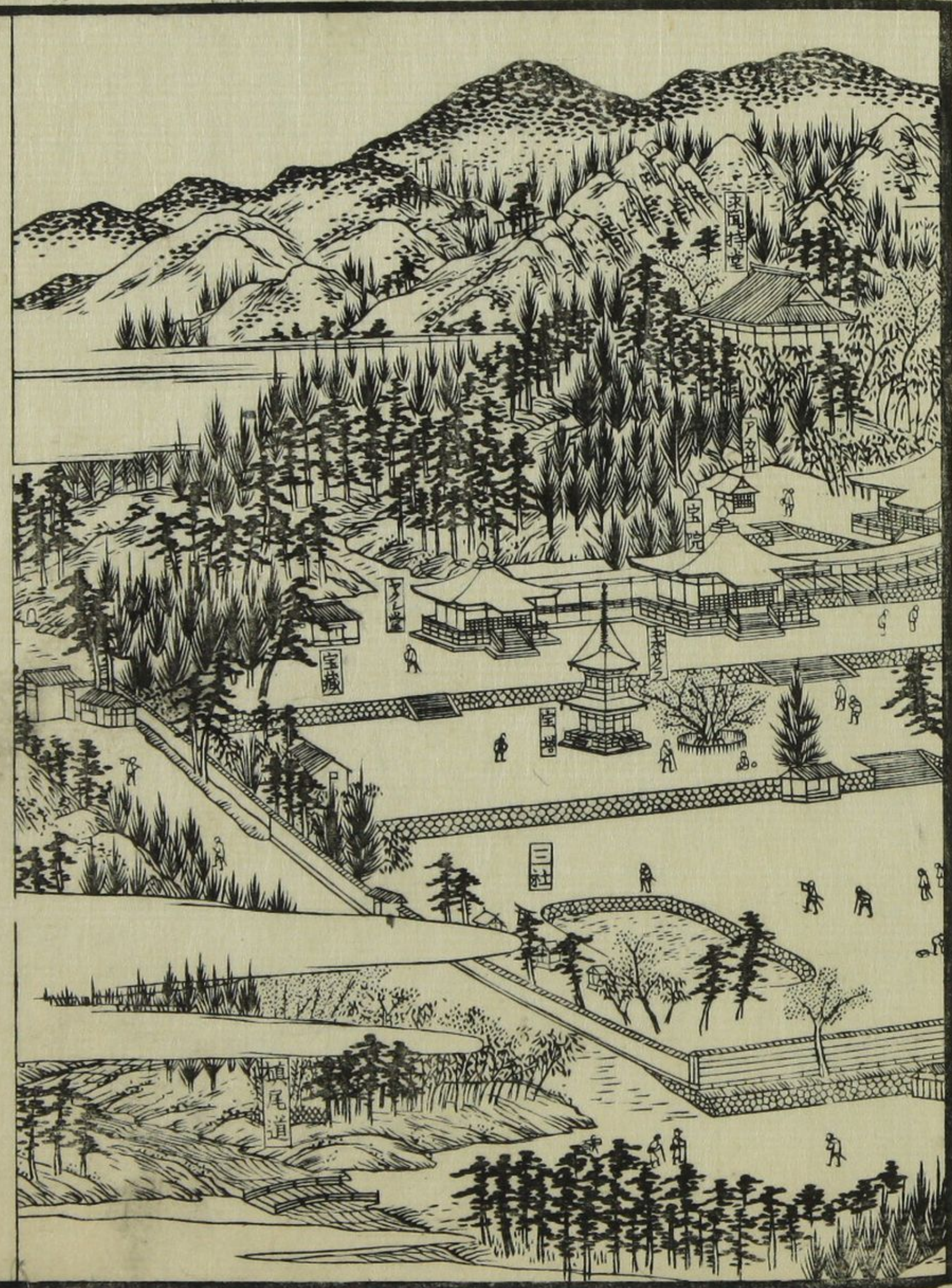
南朝第二代  
後村上天皇正平八年  
四月菅山に行幸す  
如盛の食堂と假の  
皇居と一のいふの地  
御坐りて七ヶ年ひり  
これより天野殿と  
移り  
天皇月見の御殿  
今尚存り唐破風造り也



本朝通記曰  
曆應元年冬十月  
後醍醐天皇皇子義良  
於吉野即天皇位  
是號後村上天皇母准  
后廉子也北畠大納言  
源親房為輔佐洞院實  
世四條隆助執事諸事









流き、結し、林葉の紅ひ、満山に雪のつもも、光景絶勝るべし、の事あり

天野山 金剛寺の山あり河内國の西南より、泉州に隣り、山脈く、高低あり、水音鳥啼、音、ま、時鳥の名、所、登、も、用、ゆ、事、多、  
後村上帝行宮 則、前、述、る、當、寺、の、食、堂、の、概、の、皇、居、の、其、頃、天、野、殿、の、御、

正平八年 癸巳 北朝文和二年 四月十日行幸河内國錦部郡天野行宮

正平十二年 丁酉 北朝延文二年 正月廿日寛成親王十一歳於河内國天野行宮在

此儀二月一日皇太子元服 正平十四年乙巳 北朝延文四年 十月自天野行幸觀心

寺 以上南朝公卿補任 按此地御座ると都合七箇年也

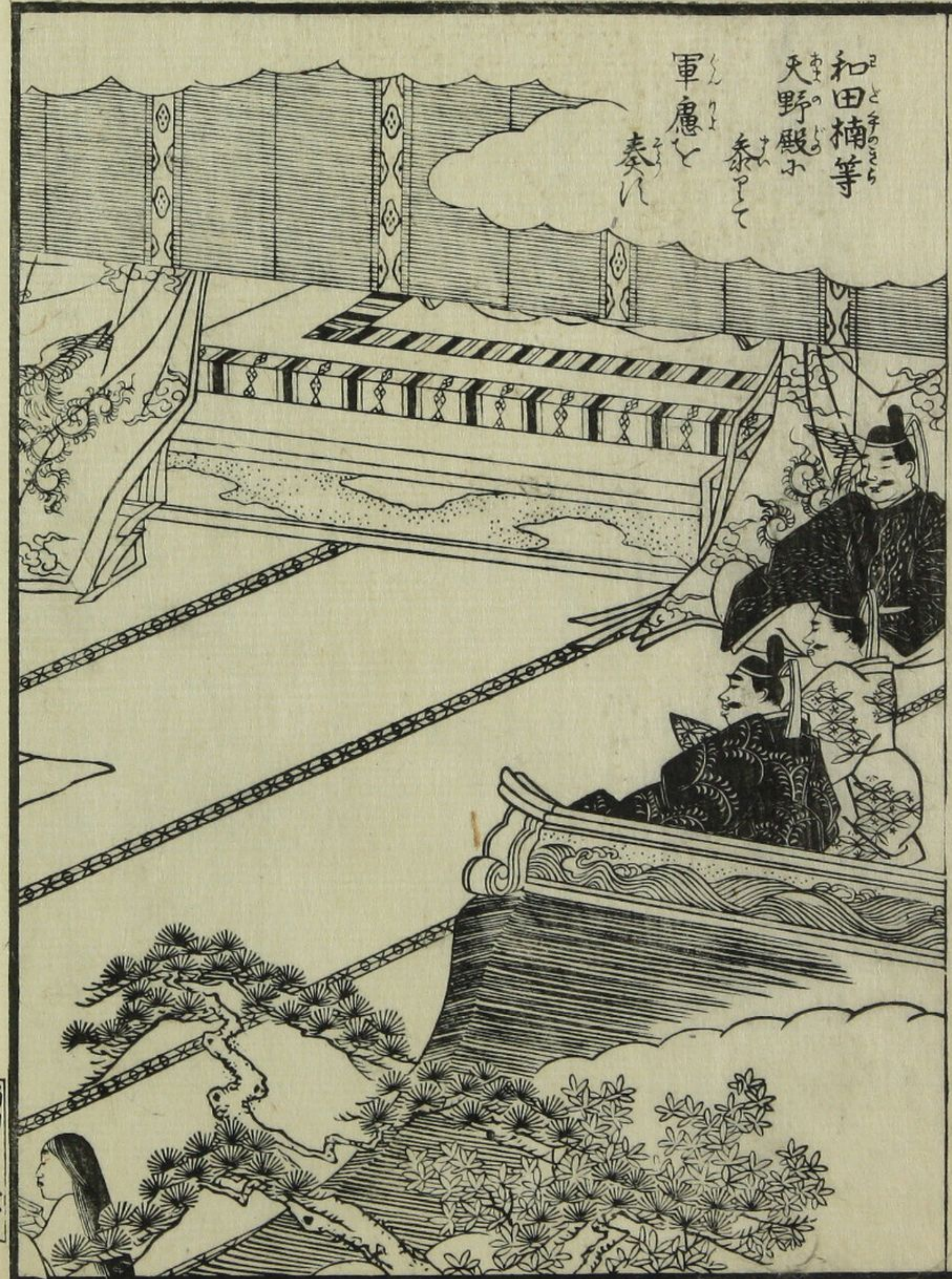
天野の行宮とてよみ傳ふるも、寺の中

新業集 君とらば峯も尾もと宮居と深山あはれ都へり 藤原為忠

此頃吉野の新帝、河内の天野とりの所と皇居とせらせり、補左馬頭正儀和田和泉正武二人天野殿へ奉じて奏聞、り、畠山入道道誓、東八箇國に勢と卒して廿萬騎已に京都へ着て備ひり、山陽道に播磨と限り、山陰道に丹波と境、東海東山南海北陸道の兵數と尽して上洛はり、備あま、敵の勢定めて雲霞の

如く、備へ、但、合戦於て、決定御方の勝とこそ料簡はして備、其故軍、この謀惟、了、所、謂、天、の、時、地、の、和、を、備、此、中、も、遠、く、時、勢、あり、の、い、ども、勝、と、得、ば、と、あ、そ、見、て、備、先、天、の、時、に、付、て、勤、備、は、明、年、より、大、將、軍、西、有、て、東、より、二年塞あり、畠山冬至以後、東國と立て罷上て、備、是、既、小、天、の、時、遠、く、を、備、は、り、次、小、地、の、和、に、付、て、案、備、小、御、方、の、陣、後、深、山、に、連、り、敵、案、内、を、次、前、小、大、河、流、れ、て、僅、あ、る、橋、一、と、路、と、せ、り、左、備、は、先、私、の、千、早、比、軍、中、に、申、小、及、び、其、後、建、武、乃、乱、り、以、來、細、川、帶、方、同、陸、奥、守、頭、氏、山、名、伊、豆、守、時、氏、高、武、藏、守、師、直、同、越、後、守、師、泰、今、の、畠、山、入、道、道、誓、小、至、る、も、を、既、小、箇、度、此、所、に、寄、り、勇、猛、と、震、ひ、戦、ひ、と、挑、し、に、敵、の、軍、遂、に、和、あり、或、死、と、河、南、北、道、に、曝、し、或、名、と、敗、北、の、陣、に、喪、ひ、是、當、山、形、勝、の、地、要、害、に、便、と、得、る、故、と、備、次、に、人、の、和、に、付、て、忠、案、廻、り、備、は、今、度、畠、山、が、上、洛、し、只、勢、い、と、儀、借、り、忠、賞、と、私、貪、り、の、志、と、備、は、り、仁、木、細、川、の、二、族、共、も、渠、が、權、威、と、措、き、土、岐、佐、木、比、一、類、も、其、忠、賞、と、嫉、ね、事、や、備、は、り、是、又、人、の、心、乃、和、せ、り、所、と、備、は、り、や、天、地、人、の、三、德、と、を、遠、く、備、は、り、縦、敵、百、萬、の、勢、と







併せても恐るゝ不足ぬ所とて惟但一今の皇居のより小浅間ある所とて惟一金剛  
山の奥観心寺と申行へ御座と揚し進ませ備ひて正儀正武等八和田河内の勢  
と相伴ひ千早金剛宗引籠り龍泉石川の邊りかちあく白く夜く相戦ひ  
湯浅山本恩池野上山の兵ども紀伊國の宇護代塩屋中務一付て龍門山  
最初が峯小陣と張せ紀伊川赤邊野伏と出でて闘ひ合せ攻よせ息とつせ戦  
ひも短氣ある坂東勢かど退屈せ備ひて退屈して引返り者かど勝一棄て追  
うけ敵と千里の外に追散し御運と一時閑じ是庶幾とる所の合戦なり事  
もかげご申る主上と始り進らせと近侍の月郷雲客小至るまで皆たのり  
事をも申るさうに聽て觀心寺皇居と移し進らせとて臨幸する小無用  
やん人々とてさうに召具させりかど申る間實もと傳奏の上卿西二人奉  
行の職事二重護持僧入衛府の官人五輩と召具せり此外は何地も暫らく落  
ちのびて御敵退散の時と待て仰出させられ撰政関白大政大臣左右の大將大納言  
七辨史五位位後宮の美婦會上達部内侍更衣上臈女房出世房官に至るまで或高

野村上天河吉野十津川の方落行浅くびる山賤も小暮身と寄る心り或は智古  
京奈良の舊都京白河なら敵と敵軍の中小紛ま居て魂と消れ人もあり 下畧 後太平記  
南方紀傳云 南帝より伊勢大神宮奉幣使とて御門二種の神器と御拜りて  
四の海は波もあはゆるまゝとてこの安と身を傳ゆる 後村上帝 御製  
九重の今もほそみ鏡とともほせ成てく光いりちと 同 御製  
天野川 天野寺の入口あり水瀧天野山より流きて秋の狭山の池に入

右天野山境内と通わけ次に廣野上原小至る

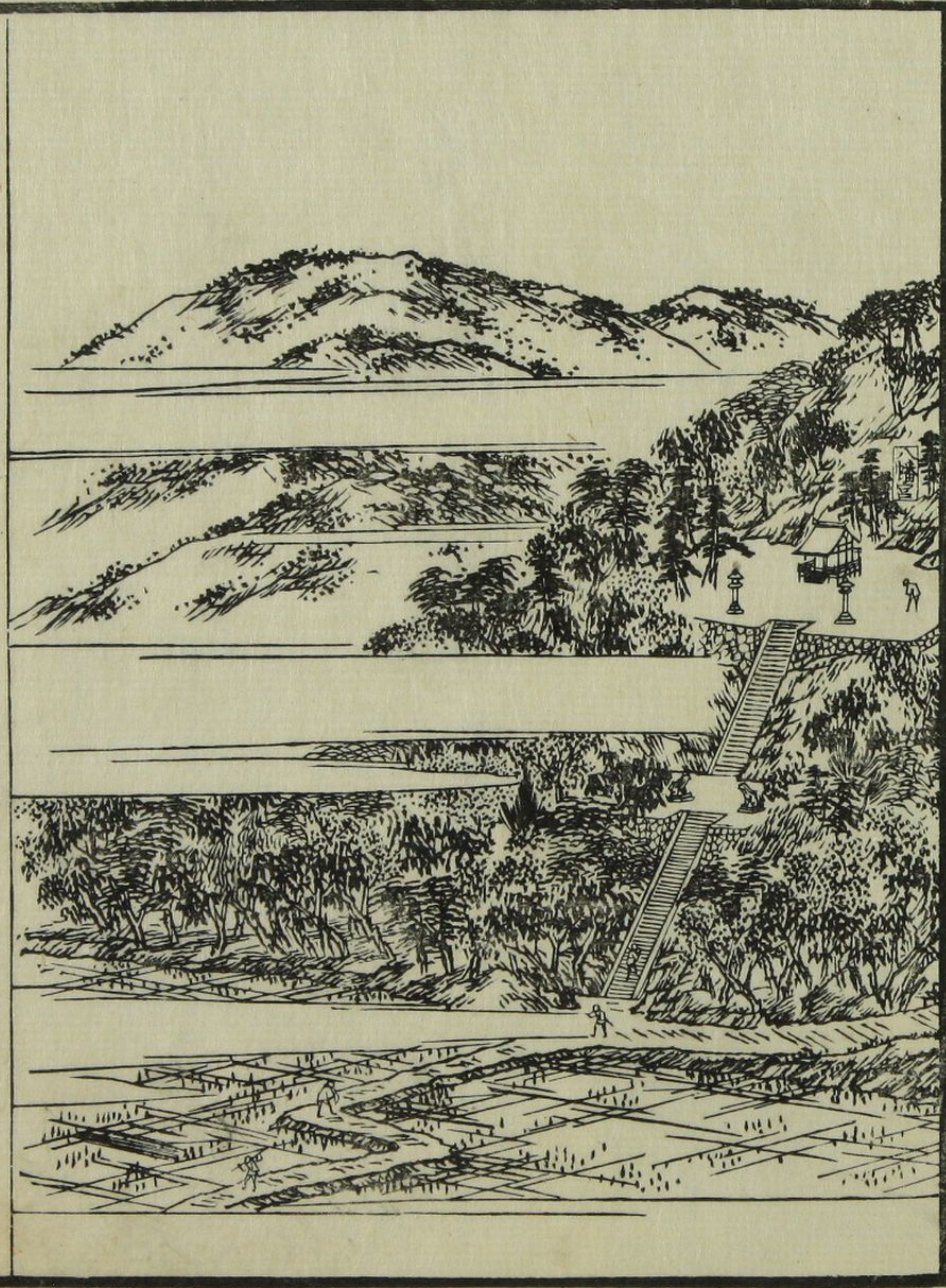
上原八幡宮 上原村の西の丘山より街道の左に見ゆる神社あり上原宗作野村小寺村の生土神

仲哀天皇宮 右八幡宮の後の上の方にある石階の下に拜殿あり例祭八月廿日

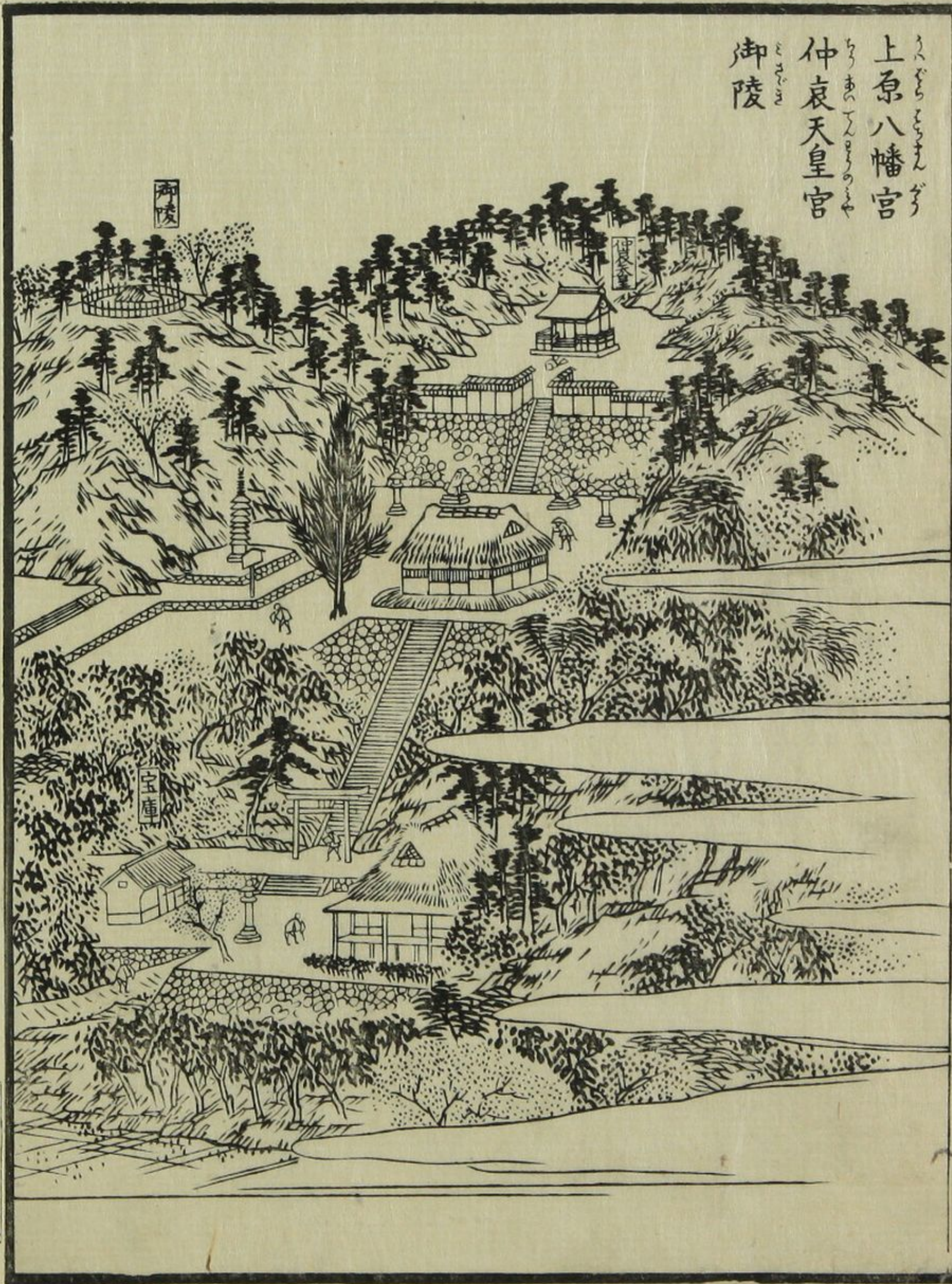
仲哀天皇陵 八幡宮の後にあり例祭とて其文と向 此陵と地東方二間 南方二間半 西方二間 北方二間 之内雜人牛馬

湘夕が按云世に仲哀天皇の陵あり高向王の墓とて高向王は用明天皇の孫 皇極  
天皇の前夫なり昔此地も今の高向の庄内あり八幡の神祠ありて仲哀天皇と稱し  
正しく高向王の墓なりとて是より河内名所園會へ高向王の墓と出せり





上原八幡宮  
仲哀天皇宮  
御陵



御陵



按ふ播州大藏令、仲哀天皇の陵とあり、是、鹿坂王忍熊王の西王子の築く所と云ふ事あり、  
 村の管内にあり、長野の神社、葛井寺の傍にあり、是、此、辺、長、野、と、梅、々、所、あり、其、  
 陵の地相、い、く、最、く、は、廣、大、なり、

**鳥帽子古城** 上田の北村上の方あり、此、所、は、五、番、道、より、右、の、方、へ、て、二、日、市、に、出、流、街、道、より、順、路、  
 上田の北村上の方あり、此、所、は、五、番、道、より、右、の、方、へ、て、二、日、市、に、出、流、街、道、より、順、路、  
 右、同、所、あり、俗、に、鳥、帽、子、形、の、八、幡、と、い、ふ、本、社、應、神、天、皇、傍、に、高、良、の、社、あり、官、寺、と、  
 德、壽、院、と、号、し、親、迦、佛、聖、觀、音、と、女、八、



**二日市驛** 右、南、村、  
 此地、京、師、浪、花、の、高、野、  
 街道、より、遠、合、の、中、に、有、り、  
 賑、々、と、い、ふ、野、山、の、僧、位、  
 泰、清、の、貴、賤、諸、商、人、の、  
 往、返、絶、不、且、外、月、の、上、旬、  
 一、し、菊、月、の、節、夕、まで、  
 大、峯、山、上、の、高、野、  
 宝、螺、の、音、に、出、女、の、昼、寐、  
 色、と、合、り、有、り、粧、  
 漢、摩、訶、の、十、七、の、新、交、  
 行、場、の、垂、い、も、打、忘、ま、  
 精、進、落、い、も、有、り、

**藥樹山延命寺**

鬼住村より真言宗開基覺彦比丘立延寶年間草創也

**本尊** 如意輪觀世音 長二尺五寸 脇士左地藏菩薩右千手觀音

**護摩堂** 毘沙門天王 本堂の左向より表門の正面より向ふ

**鎮守祠** 本堂の向池の中より 經藏 客殿の向の上の方より 鐘樓 經藏の左傍より

**靈位堂** 經藏の右の傍より 勢別神戶村久廣代の靈牌とくく納む

**觀音冥應集卷之二曰**

河内國錦部郡鬼住村藥樹山延命寺本願瑞峯道雲、上田氏あり、古老相傳てて  
 曰昔何ぞの御代より有るん泉州和泉郡血滄山、大鬼神あり、是男鬼なり、此  
 村も亦女鬼あり、夫妻して人民を害する事數と知り、萬民大愁して天子に奏し  
 歎れ、御門國中に詔と下して募り給ひ、若し鬼と退治する者あり、勸賞乞  
 へ住せらば、然るも天下の武士敢て此鬼と退治せんといふ者あり、其時、河内の人  
 あり、勇悍として、その上手あり、即ち輒く此鬼と射殺し、萬民大悦び、事と  
 以て帝に奏するに、天子甚と歡感あり、つて勅し給ひ、國の大害を除く事と



切並びし何事ともこ随つて賞せしむる有れば彼人曰く官位俸禄は本より  
望まざりて願ひに姓氏を賜はつて後世傳へば宣莫太の御恩にあらば哉と依り  
上田氏に賜はつて四の賞し給ふの論旨と成下されしと言ふ其人鬼と射る  
引矢今傳て延命寺にあり今に至るを村老鬼と射るの法と學ひて正月二日  
毎年是と作せり因に鬼住村といふや道雲其嫡孫あり道雲の父と淨通  
とい淨通の父と淨雲といふ淨通子ありして金剛山法起菩薩に祈りて道雲を得り  
道雲勇悍又人勝を剛直して信心堅固なり寛永正保の間高野山新別處に  
中興良永律師伊勢の亮典上人申逢て法を聞く且又肥前桂嚴禪師と莫逆の友  
あり正保二年九月廿九日の夜弘法大師道雲の僕喜八といふ者託して種々の事  
を示し給ふ中道雲の觀音ありし宣ふ時舎弟良信ありし予が又玄澤あり  
四五人其座にありて寶篋印陀羅尼尊勝陀羅尼千手陀羅尼各百餘遍誦  
して願ひに奇特の瑞と止り給へ種々の祈誓ありし二時より有て喜八熟睡  
し翌日起て後昨夜の事とて一ツも覺び道雲より思ひ如何なる故より

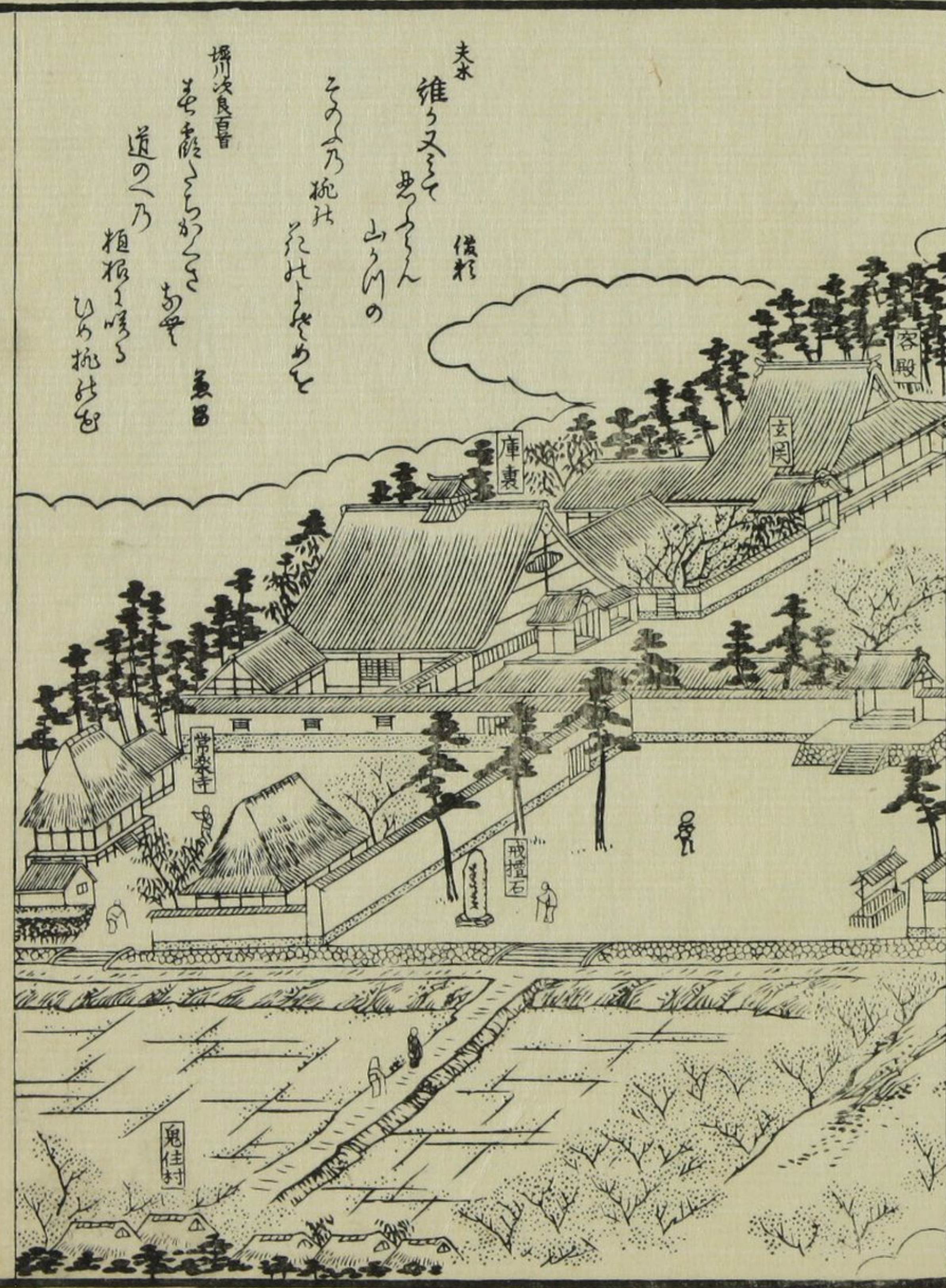
斯し給ふや疑ひ散る所或夜の夢小自身忽ち二臂の如意輪觀音と成る  
夢覺て扱我の如意輪觀音と信仰奉まゝの瑞相とせんと思ひ金剛山の仙良坊  
とて頼の如意輪の尊像と尋ひ奉らば仙良紀河野邊村に旅宿す時夢中  
人より告ぐ曰く吉野郡湯川の町の何某の處に如意輪の像あり彼尊像とて  
道雲より一ツ一仙良坊より一ツ夢を標して往て尋め小教の如く在りしと  
得て道雲より道雲大に觀喜して信心より增長し朝夕小禮拜念誦と事怠り  
不斯くはの靈像を修行末の事と夢想し告まじり給へ至心祈誓とる正保  
二年二月十九日の夜本尊示し給ひ日本本願之正告の道雲つり此意と按ず  
る今此俗宅に後清淨の伽藍とて此尊像と安置し正法住持日本第一の靈場  
あり現世小廣大に衆生濟度せん大願と發して毎日如意輪陀羅尼寶篋印尊勝  
千手陀羅尼光明真言隨求句陀羅尼おと念誦して祈誓せられし願狀一通  
別あり余後寛文十一年九月廿九日道雲平に延寶五年丁巳先師淨嚴和  
尚延命寺と草創して九月廿九日又道雲の七面已の法事と當り給ふ時當



つて古の箱の中より本尊の来歴をひき道雲の願状ホ出たり和尚大に驚嘆し  
母並び一家兄を澤澤尋ひて悉く喜ぶ託宣の事ホと聞給ひ不思議の思ひに作  
り今延命寺即ち道雲の宅地なり其後貞享元年甲子十月十二日故有  
て関東に赴き給ふの奇瑞あり彼喜八老後剃髪して宗心といふ宗心十三日の曉  
に興て延命寺に見る方丈の屋根棟より黄赤色の瑞雲二筋出て東と西と  
鬩隸々本細末大之宗心私思らく是和尚東都に於て廣く弘法利生に給  
ふの瑞相あり心中に祝は然るも聊か今結らば又思ふ様是程の奇瑞と  
人告ぐる人も口惜と思ひて十日余り過て寺に來り具言す予に結まり此瑞他人  
の目に見へ宗心獨り見ざる不思議あり後一家兄書東に於て和尚に白く和尚笑つて  
曰先考の願成就は是瑞峯道雲の瑞相なり即ち方丈を扁して瑞雲菴と号し給  
ふ彼一臂の如意輪の像石の尊像と同なり御長寸分若石座一の足無下  
一の手に蓮花と持花臺如意寶珠の左の手に願の印して天冠と着  
給る尊像なり此像は故蓮體先師向て一臂の大像座像二造を彼小像の體中

納め奉りて今圓通殿安置せり尊像様は靈驗有るも恐るれ書載じ  
此淨嚴和尚覺彦並祿謙と淨嚴といふ自妙極稱は則ち常鬼住村上田氏の  
子也傳云母懷胎して若魚肉葷草を食ふ時必く嘔吐し出生すと至つて又奇  
瑞あり二歳して文字と知行止凡る人呼ぶ今弘法より九歳して高野山  
に登り難澁其學業拔萃に故郷慈念の家を改めて寺に延命寺と号し  
教興寺と再興して時元禄四年大樹引見して寺地を賜り創て精舎と建且齋  
賜い令して関東真言律の本寺といふ則ち東武湯嶋寶林山靈雲寺是なり  
元禄十五年六月二十七日遷化し壽六十四ト云  
泉州又鬼むび當村桃樹多し弥生の頃二溪錦と曝はぐく彼武陵の桃源  
とも言つべし光景あり夫桃西方の木五行の精仙木として能邪氣を厭伏し百鬼を  
制し漢土にて桃符桃板桃符を用ひ本朝に神代に伊弉諾尊桃子二箇以  
採て火髻女と撃つ惡卒皆去る依て桃樹と勅して名を授威神富命といふ日本紀  
にも桃を以て鬼を逐事ありて和漢にも小其事實相同し今尚例年除夜大内ハ桃





本堂  
 客殿  
 庫裏  
 戒壇石  
 常楽寺  
 鬼住村  
 堀川良直  
 道之乃  
 植根之乃  
 ひらね社  
 未水  
 維之又  
 佐村  
 山ノ乃  
 枕社  
 花下之乃



薬樹山延命寺  
 本堂  
 客殿  
 庫裏  
 戒壇石  
 常楽寺  
 鬼住村



弓桃杖以て悪鬼と追の御式りせし追難は禊は是と鬼やいもり諸寺諸社  
ふ於て追難の祭とい事皆是准行のこれ當村桃樹の尋る事百鬼と制を故依  
て昔より裁置のいふ鬼の盤鬼潭の言傳の古跡のいふ今其在所詳のい  
是より觀心寺に至る事凡廿余町二百市の駅より此一詣るこ半里許

檜尾山觀心寺

觀心寺村より本堂南面真言宗

本尊七星如意輪觀世音

長二尺六寸 弘法大師作 服士不動明王 長二尺五寸五分

建掛之塔

本堂の東の向より 往昔楠正成建立の所戰國ありて其宿意を累なりて此の  
故に後屋根の葉昔より是より建ての塔と後

心柱と大日如來一表

四面小阿闍佛 寶生佛 彌陀佛 釈迦佛と安ん

御影堂弘法大師

長二尺八寸塔の 經堂 塔の北より 地蔵堂 表門内の西側より

賀利帝母社

神祇部首禰摩の作 長二寸五分 厨子の惣長九寸二分圓木作

獨鈷玉井

賀利帝母の社の側より 糸櫻 同玉井の傍より奇代の大樹にて無枝長

七星降臨所

境内七ヶ所より何れも 辨財天祠 本堂東傍池の中より

開伽井

本堂の左の後より 禮拜石 本堂の前より弘法大師七星降臨を拜し

實惠上人廟

本堂の東上の方より 當寺の開山より 謚道興大師といふ此地の後山と檜尾

本願院

右廟の前より實惠上人の像と安ん 長二尺一寸五分

元亨釋書三曰釋實慧は姓佐伯氏讚岐國ノ人ナリ初ハ大安寺ノ泰基ニ事ヘテ唯  
識ヲ學ビレシガ後ニ弘法大師ニ隨テ兩部ノ密法ヲ稟ラレケル然ル間弘法ハ厚ク此人  
ヲ稱美シテシカモ告テ言ルヤウハ歡ビシキ哉杖法ノ興隆セン事偏ニ汝ノ勢カナルベシト是  
ニ附屬シテ東寺ヲシモ預テラタリ天長四年六河内國ノ觀心寺ヲ建立セラレ承和十年六  
奏問ヲトゲテ東寺ノ灌頂院ニ於テ春秋二季ニ結縁灌頂ヲ修セリ是ヨリ前同キ年  
号ノ三年六敕トシテ東寺ノ長者トナリ抑此長者ト云ル職ハ正シク實惠ヨリ始マル事  
ナリ弘仁天長兩帝イヅレモ信心恭敬シ給ヒシ様躰ハ抑其時代ノ僧侶ニ誰及ブ者ヤ  
公有ベキ同キ十四年十一月十三日ニ遷滅ヲトレリ年六十三ニテゾ有シ

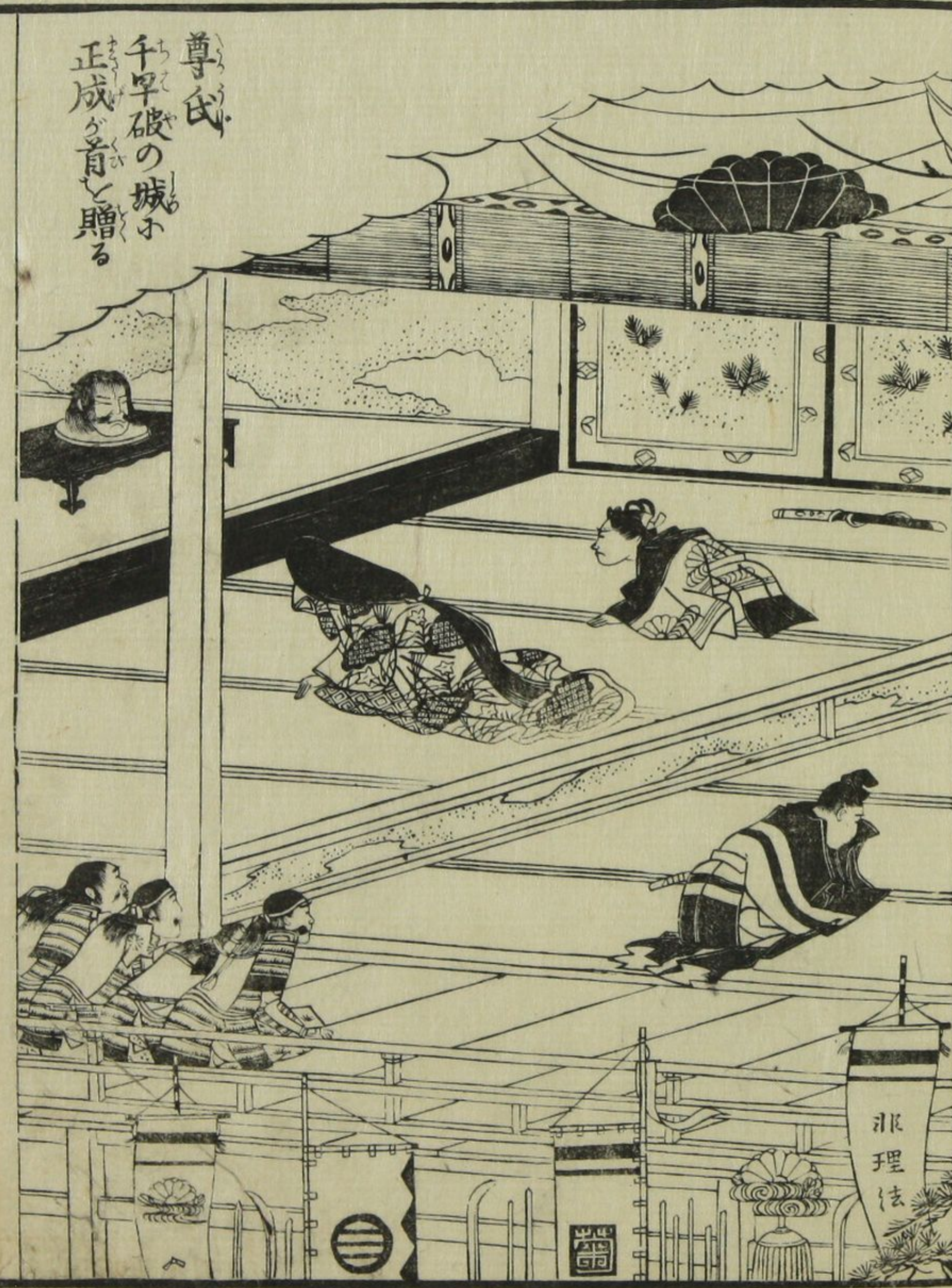
楠正成首墳

右實惠の廟の東より 延元元年五月廿五日攝津瀨川に於て戰死敵

埋しし所の所なり此墳の周を木柵ありて近來石を以て是と作る東西八尺五寸南北九尺九寸  
高一尺石の幅五寸角惣二式攝津觀心寺にあり石堀の北面角柱とのけり中央七本一銘文と錫  
一行十字づつ柱一本小文字二行づあり  
もて百二十五字左の



尊氏  
千早破の城  
正成を首と贈る





傳聞正成教訓子弟眷屬 謂曰溥天之下莫非王土  
率土之濱莫非王臣爾況 所補三州之守誠莫大之  
君恩也不如一節以死報 國於聊不忠之輩不可爲  
我子弟于茲家族守訓言 專忠貞而不變至今四百  
有餘歲美名存乎不肖流 孫衣敝緼袍與衣狐貉者  
立而不耻思惟先祖之餘 光矣哉故鑄墉以無永久  
寛政五癸丑歲仲春吉日 橘成位欽書

大平記卷第十六云

右成位橘成位欽書

其後尊氏鄉楠首と召きて朝家私習久く相馴れ舊好の程も不便あり  
跡の妻子ども今一度室に親ももつと見度思ふらめと遺跡送られも  
情の程と有ぐらま楠は後室子息正行是と見て判官今度兵庫に立一時  
さむぐ申置一事も多る上今度の合戦に必死に討死とて正行とあり  
置一ぐ出し限りの別をらりと兼て思ひ儲ける事れも親と見れ夫が  
ぐ月塞と色裳て替見する首と見ると悲し心胸に痛く歎きの泪をこぼす

楠正成書

はるる何れも事々か折為所新務親の寺大陣  
ゆはる不動の年後には下 備名はくはる中を  
寺はるるの明後には下 備名はくはる中を  
なはるるの明後には下 備名はくはる中を  
十月廿六日 正成判

滋賀の房

楠正行書

頼作所造管為所遷宮とて日少及森入  
必く 名はるるの明後には下 備名はくはる中を  
十二月一日 正行判

楠正儀書

親心寺任侶等申當寺座主職事申状 副具謹  
進上の子細載状於此方可有所披露儀  
名はるるの明後には下 備名はくはる中を  
三月二日 左衛門尉正儀判  
進上御奉行所



畠山尾張守墓 楠首墳の東ニ基ヲ立輪の塔也

一基銘云 釋迦寺高源道漢大禪定門 天正元癸酉六月廿五日滅 是畠山尾張守昭高法名也ト云

同 多寶寺高旭大禪門 天正四丙子十月十五日滅 是畠山尾張守政國法名也ト云

按政國畠山尚須入道ト山の子也尚須ハ管領持國入道徳本の猶子左金吾政長の子トシテ十八歳の時剃髮シト山入道ト号バ又昭高ハ政國の子治郎高政の子ナリト聞ケル

續應仁後記曰河洲高屋の城主ハ故ト山禪門の三男畠山尾張守政國彼家を継来リ老後遊佐河内守長教一國の政吏を司リテ形ノ如ク其國を治リ慶小近年政國

隱居セリ其子畠山治郎高政家督相續ト乱中の國務を執行云 弘治永祿年

畠山尾張守持國入道徳本墓 加藍境内ト申スル中ニ南山中ニあり五輪の塔ナリ

應仁前記曰後花園院御宇嘉吉三年足利義政公家督相續ト給フ其時の管領也

畠山尾張守源持國カ也後ト剃髮トシ徳本入道ト号シ天安元年正月十日徳本

宅ハ沖成を申請ス翌二年徳本老衰の故トヤ管領以辞退ス云畠山道徳

本ハ實子カキ小トシテ舍弟右馬助持富の子息弥三郎政長を養ハ家督トシ

左金吾尾張守小任ス其後徳本入道妾腹の子を生シ是を義夏トシ後トシ

右衛門佐義就ト号シ云

後村上天皇陵 楠塚トシ二町トシ身トシテ陵墓荒蕪トシ叢林四面トシ鬱茂シ

正平廿二年 戊辰 北朝貞治七年 二月九日讓位皇太子寛成同月十一日先帝崩

御年四十四 四月廿七日奉葬河内國檜尾山陵御追號後村上院

本朝通紀曰曆應元年 南朝廷元 冬十月 後醍醐天皇皇子義隆於吉野

即天皇位トシ是號後村上天皇母准后廉子也北畠大納言源親房為

輔佐洞院實世四條隆助執奏諸事トシ

同書云延文二年冬十一月鎌倉の執事畠山道誓大軍ト率テ上洛トシ義隆

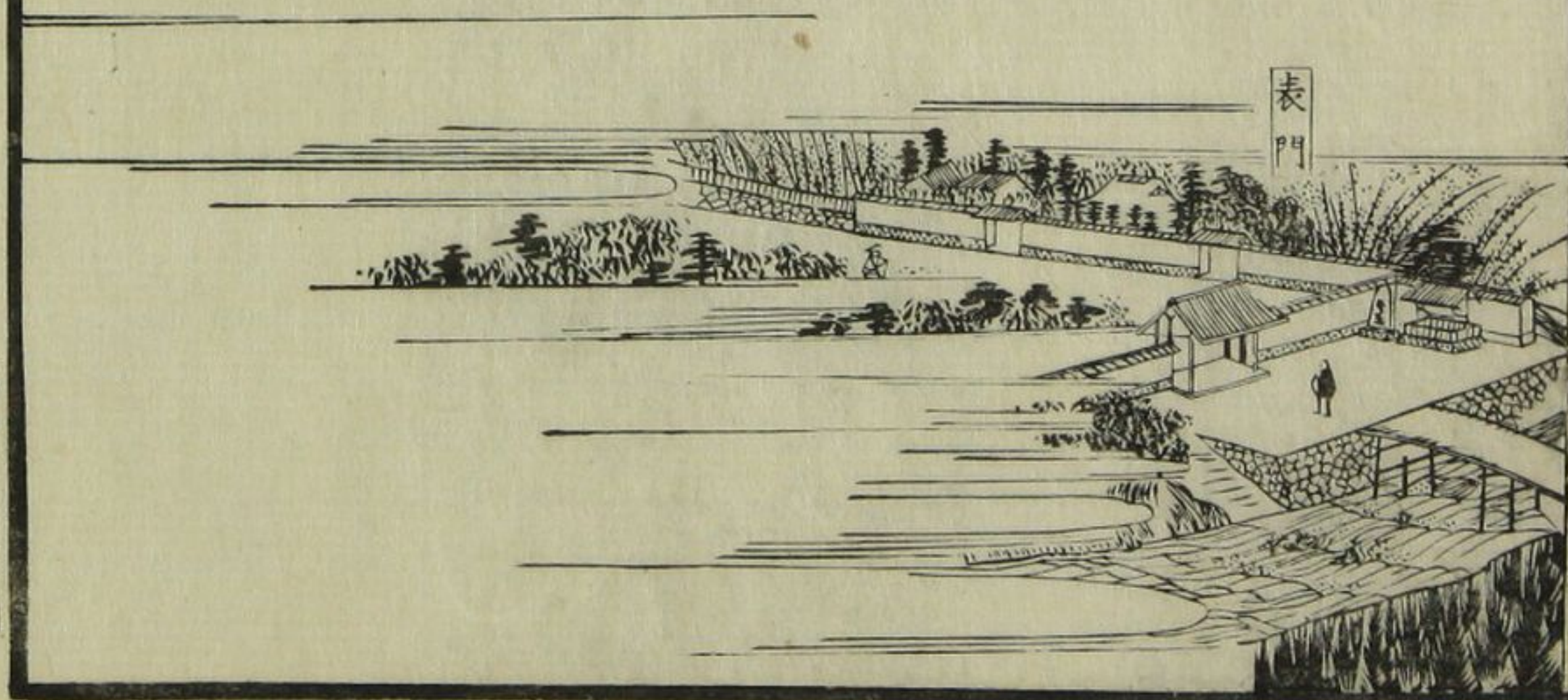
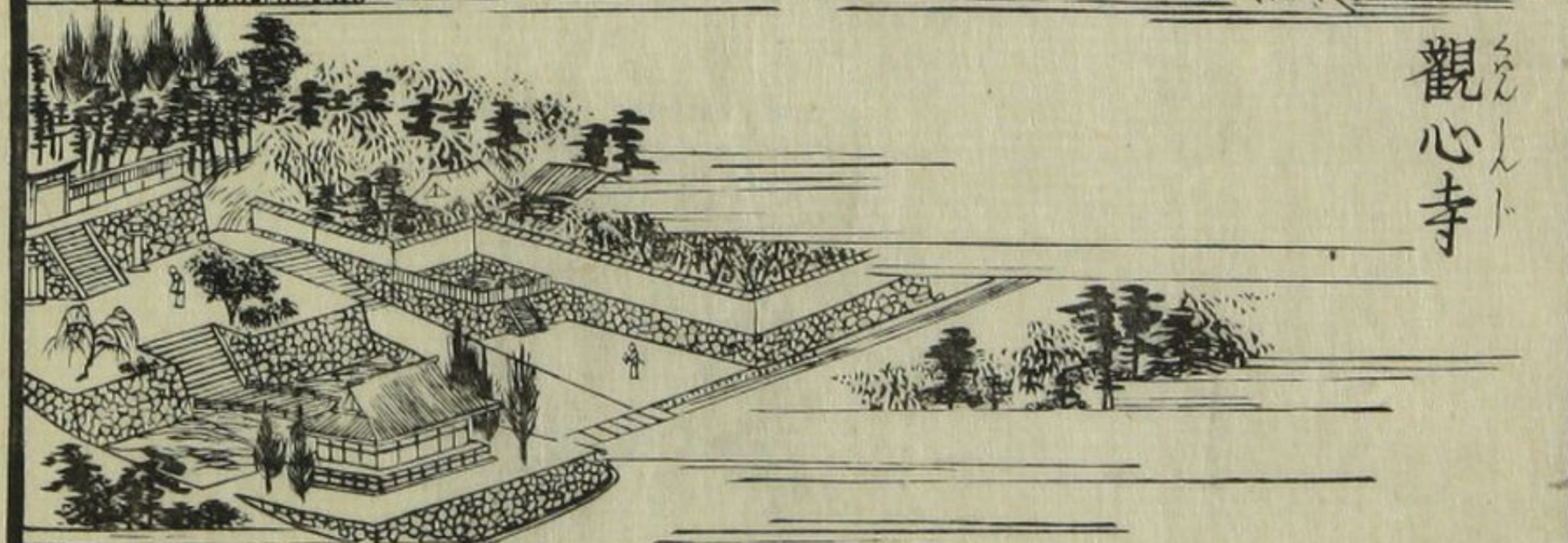
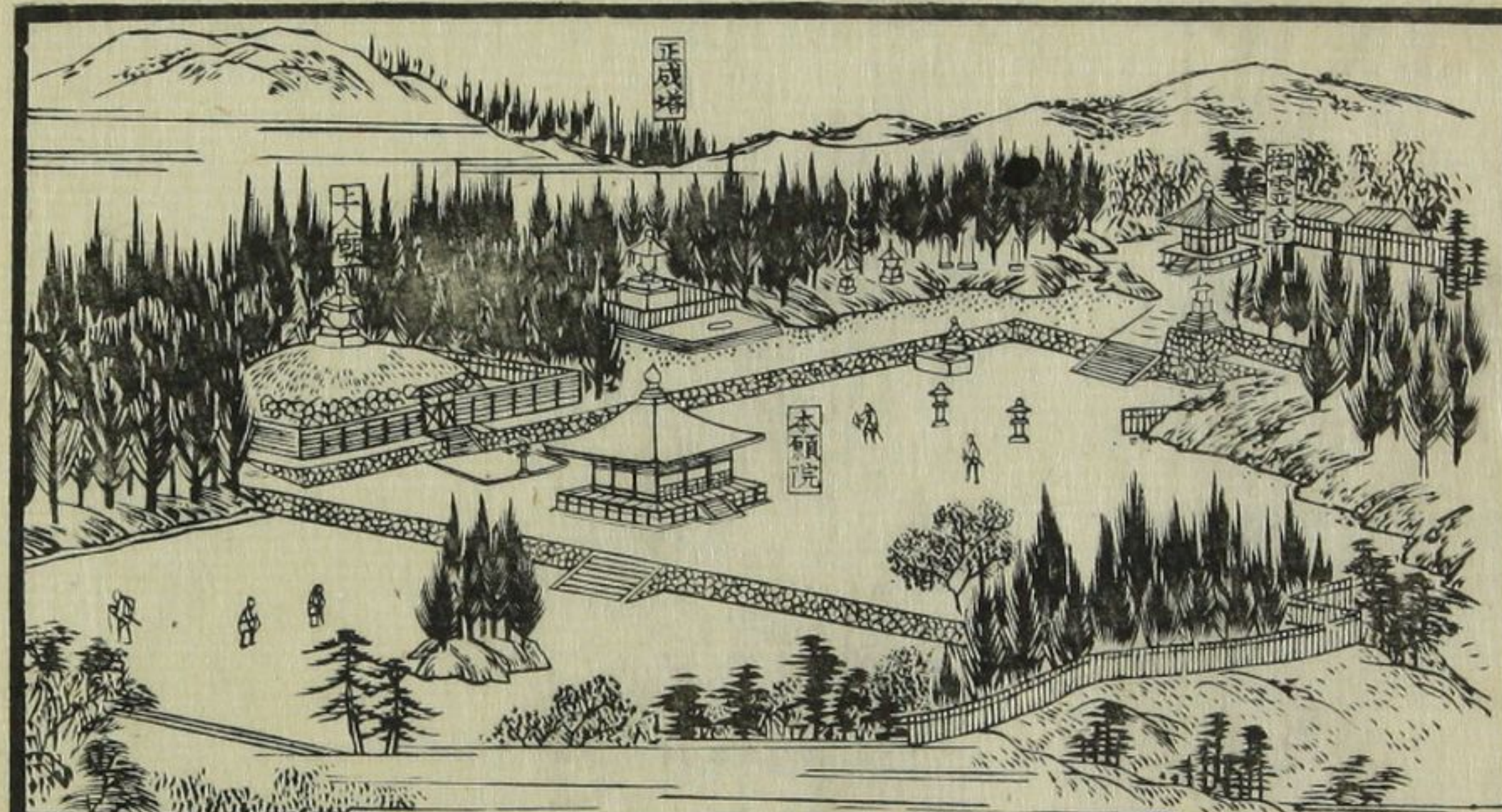
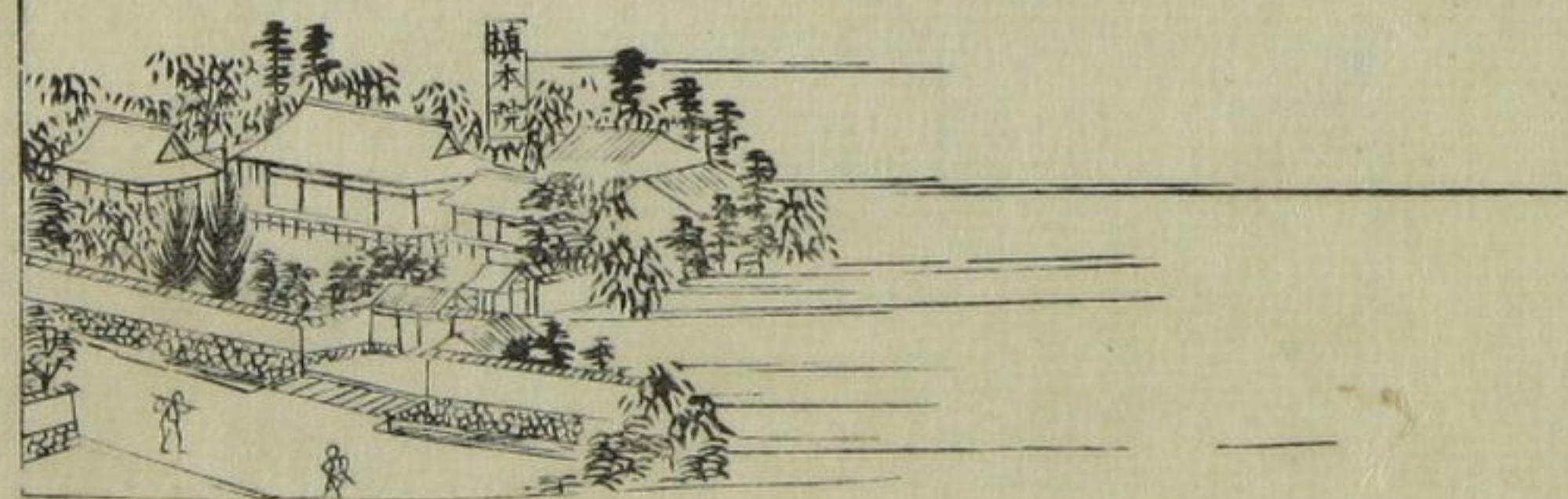
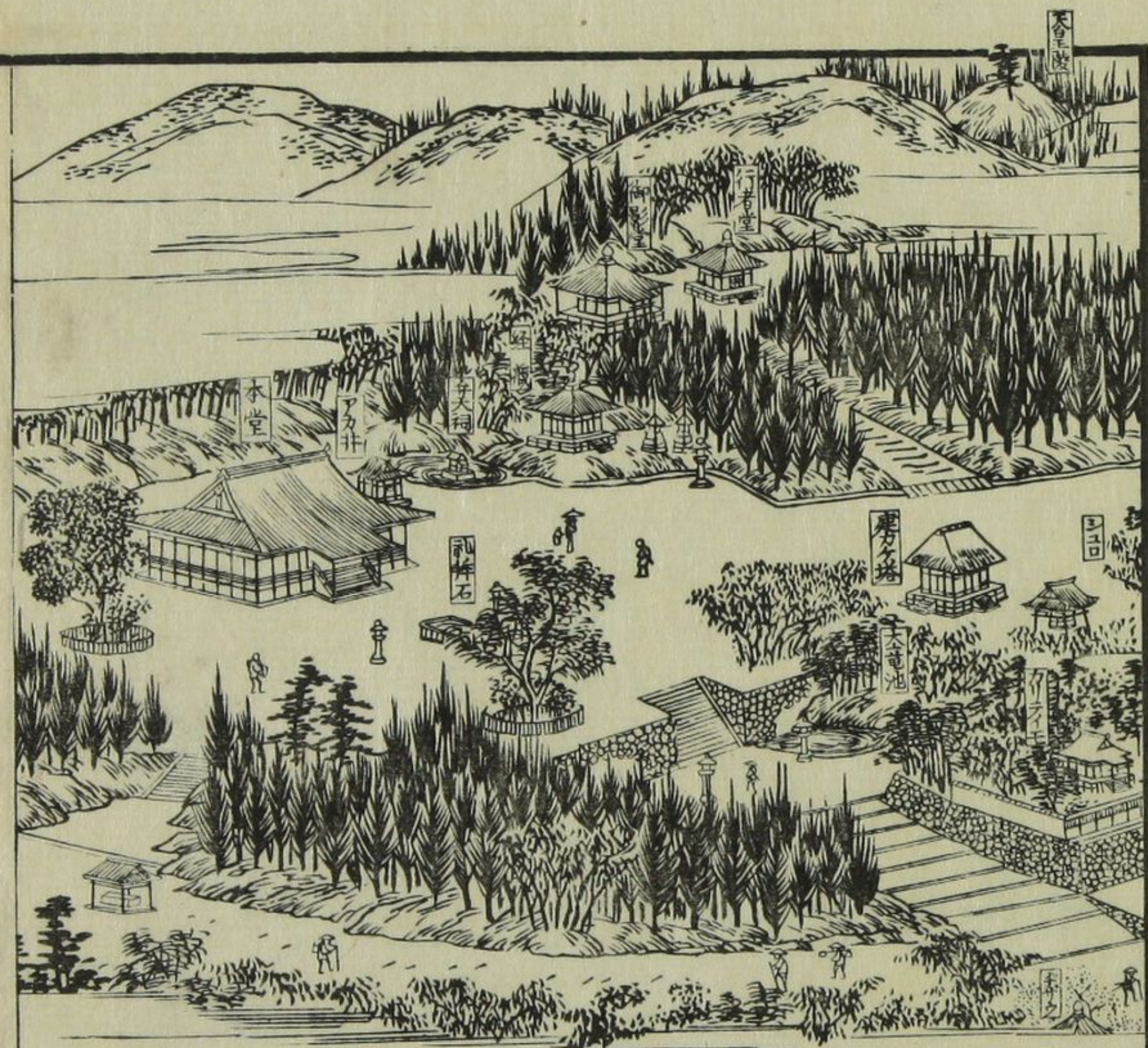
獨リテ南朝ト號スル事ト勸ヒ同十二月義詮カシビ道誓數十萬ト將テ南

方ト向フ補正儀和田正武等ノモト御トシ

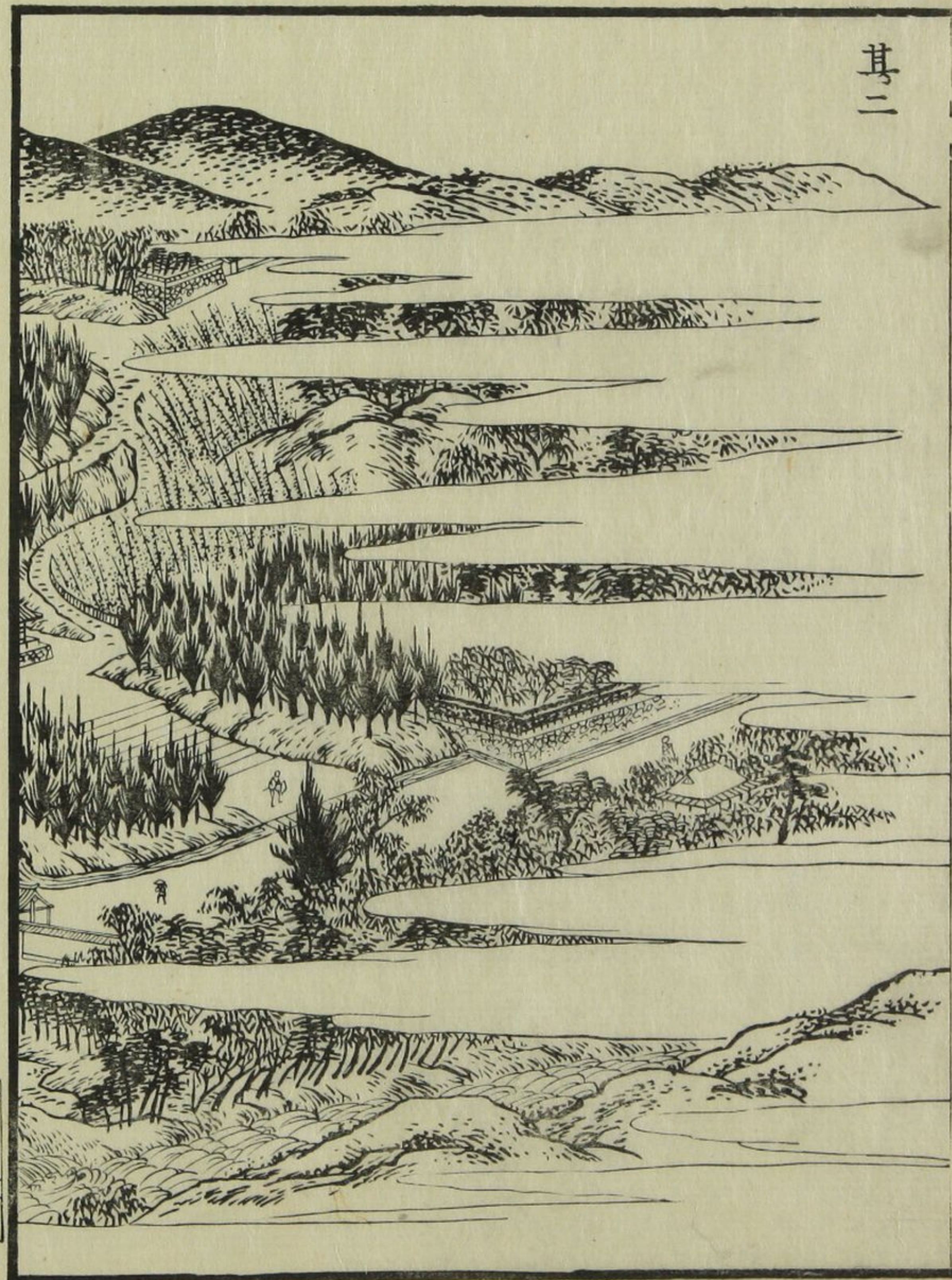
此時義隆ハ七萬騎ト率テ大寺小向テ厄ヶ崎ニ陣トシ道誓ハ櫛手ト向テ二十山ニ軍トシ以其他の鄉村山野トシテ軍勢の陣セザル地トシ是トシテ馬頭正儀和泉守正武等相候シテ皇居ト當觀心寺ト移ヒテ天野ト在リテ地理輕捷トシ守備ト便トシ故トシ

南朝公卿補任ハ延文四年十月天野ト觀心寺ト小行幸ト有









其二



觀心寺官符曰

寺壹院 在河内國錦部郡石川郡西郡南山中

合山地 千五百町

錦部郡以山中二十町

地名仁深野

四至

東八限横峯

南八限小月谷

石川郡以南山中五百町

西八限記伊道川兵公田北八限龍泉寺地并石川郡界

四至

東八限國見峯

南八限上籠

西八限峯

北八限石川家井堰

兼和三年閏三月十二日

官符

夫當山往古弘法大師經行の伽藍として北斗七星降臨の靈地なり峯葉  
は聳へ自ら華藏蓮刹と表し谷四方より行りて更小月國達池と摸り遙ら  
に都下の俗塵と阻て獨り神異の山嶽といふに僅小厩塚へまはこ密に  
觀念成り易く暫らく斯地に住せし印頓證あり小朗あり初め雲心寺と  
稱せしと後改めて觀心寺と號し良し勝地絶妙なり時弘に天長の 帝王當寺の

神秀と貴きゆひ御願の道場と定めり兼和の時に至りて始めて山地勅施の  
官符と下さる以て當寺の永格の寔は皇道潛衛の伽藍上乘秘察の精  
舎なり又本尊觀自在菩薩壇弘法大師一刻之禮の美功と勵む懇丹の至精洩  
盡し依せり尊容あり金堂の前より石座大師平日小堂と并佛一禮  
しの一祈して滅後の今に至りて日向の禮石とせり鎮守河梨帝母の  
神體、毘首羯摩の彫刻して青龍相傳つる形像大師歸朝の日將來ゆひ  
當寺に安置ゆい靈水の阿伽井金堂の東北より獨古玉井大師の穿らゆひ  
て秘密加持用いさるゆい祈りて今其奇特顕然なり尚當寺の勸錄縁起を委  
し唯其大概とある記の尤勸錄縁起二卷弘法大師の上豆真雅實慧西上人  
の勸錄として後小松院の宸翰なり則ち御書判ありて漢文あり應永廿年癸巳  
二月中幹関白經嗣の奥書なり 靈佛靈寶什物中寶庫に満て奉て牧らるる

御繪旨

禁裏御本尊愛染王像就被安置當寺内陣  
永代勅願長日行法事 繪旨如此鎮令



修五種相應淨業宜奉祈四海清平  
聖化之由依東寺長者法務僧正御房 仰  
執達如件

正平十五年正月十八日

觀心寺之僧正  
法印仲尊

此余御給南朝の國宣楠氏由山等の書翰許多有り

坊中植木院什器

茶壺 二銘待曹十六夜 豐太閣御所持 太刀二腰 一銘行平 南帝より拜領 一銘正宗 楠公所持

牧溪 觀音 像 舜恭 芥子 画 趙子昂 杜律詩意 辰唐圖 雪舟 觀音 像

呂輝 孔雀 像 雪村 朱買臣 秋月 三笑

坊中中院什器 此坊舎楠氏一族の宿坊也

青貝乘鞍 絛威腹卷 何事も楠公所持當院に寄附の書翰名劔身一

應安元年千鈿破の城を攻るの時北軍山名時氏當中院と陣所なり 此時愛深明王の靈驗ありし事後太平記に見ゆ

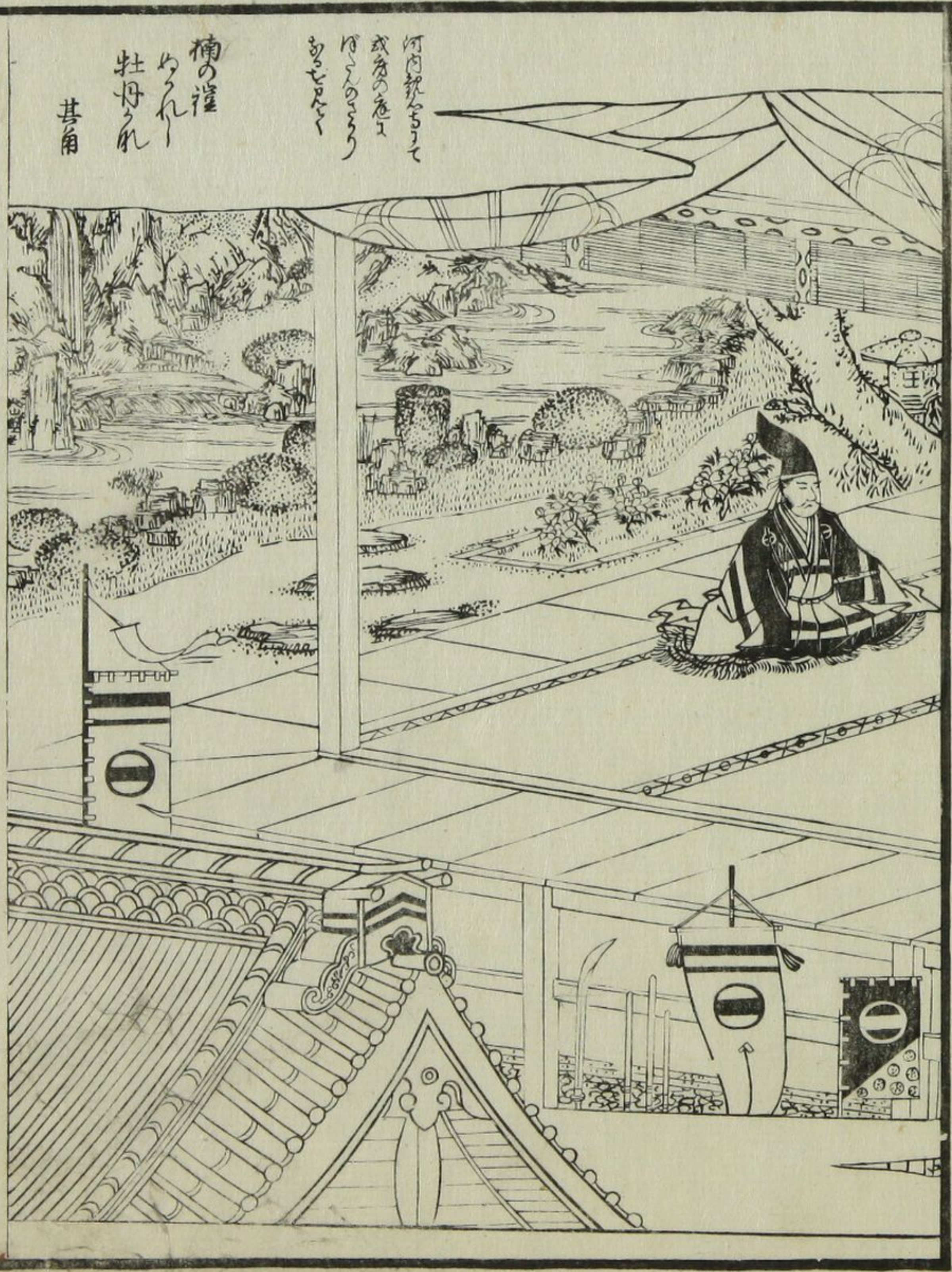
後太平記卷之二云

山名伊豆守時氏同左衛門佐師義同民部少輔氏清、觀心寺の中院と陣

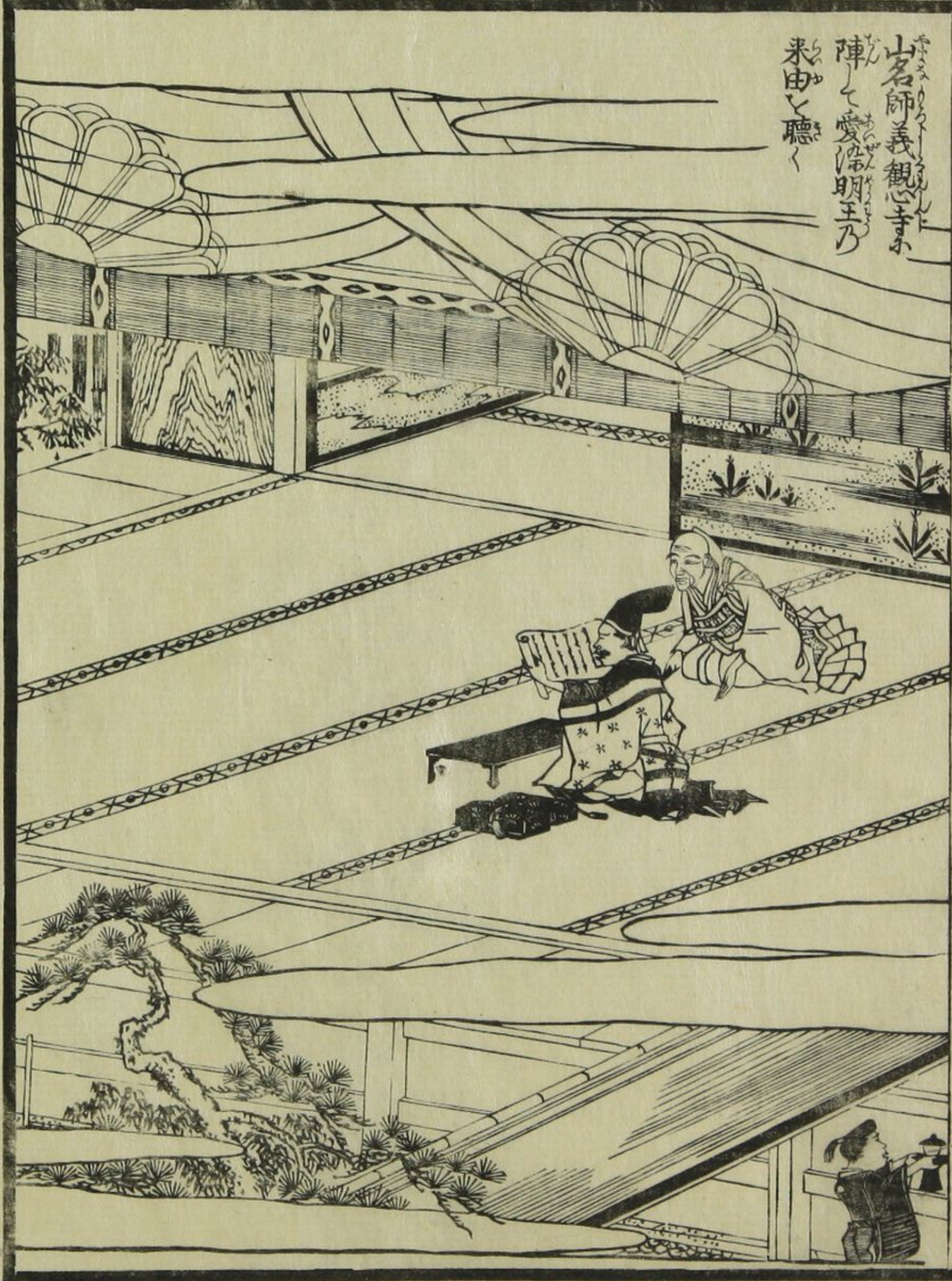
會し毎朝佛殿に詣り信心と傾け武運と祈るも、其時一の不思議あり  
夜毎深更に佛殿鳴動に新し凱声と作るる是、奇特の瑞現なるに擬疑し  
急に院主と呼て事の探と尋らるる院主曰抑此中院と申れ去ゆる元弘の終り  
楠正成菩提の爲修造の寺と候ども正成正行討死の後一族戦勞の表へ  
甚しく誰修理と加ふる人もあらず御覽の如く荒落塙壁廢を堂上秋と留  
りて月昭々る星霜軒寒々青苔紅葉拂へる盡に堂下春と挑げ草  
蕭々る生涯鉢室にとも愁へる朝暮茶碗飲とて飢と凌ぎ候亦佛  
殿鳴動の事、當寺本尊の服を愛深明王の靈驗とて惟ふ然るも此愛深  
明王後醍醐天皇より楠正成勅与の尊像とて惟ふも正成討死の、當  
寺に安置し子孫に傳へ遺書と置れ惟ふ然るも正儀正勝一族皆  
討死の誓とて辞退候ふ間大和國平一揆に正成一族とて惟ふ平一の郎左  
衛門尉盛政、渡りて候此明王楠氏と擁護し、い子劍破の城、事有  
と此寺内必ら鳴動つるる靈驗あり候は是、拜と給ひ使らるる



河内親王  
 式部の座  
 何の座  
 ありんか  
 楠の座  
 ぬれ  
 牡丹の  
 其角



山名師義観心寺  
 陣と愛深明王乃  
 来由と聴く





先帝の綸旨を捧ぐ師義三拜し誦上らる

愛深明王橘正成誼授与之軍法守佛可令拜信者

天氣如此悉以狀

元弘元年九月朔日

右少辨

楠多門兵衛

時氏師義謹ん感聞一拜信斜あふ院主重祐く文書二通取出  
正成當寺へ明王薩埵改寄附の状なりと捧ぐ一書とひくひく誦上一書  
見續し及び

急投飛戟述思懷候訖然者頃尊氏直義起鎮西發竊軍  
帥群勇二十萬騎列分於海陸二道近日攻上由風聲流  
聞於事實者天下太変不可延時因茲馳向兵庫可致防  
戦之旨勅宣甚以急也正成備領軍盧度之官軍微率而  
何豈當於大敵矣依數雖練奏君曾無御許容宜垂淚痕

西四ノ二十五

今日發京師赴戰場訖嗚呼命懸養由失前義比紀信忠  
欲致戰死之條無他事將亦元弘年中自天子御勅与  
之愛深明王為子孫武運貴院可安置路次迎佛之僧一  
人至兵庫可被差越候委曲期其節可演説者也不宣

五月十六日

河内守正成

觀心寺中院御房

時氏師義氏清らきと感見一敵とて正成古今無雙の勇義と感下各  
洞と催され斯る所寺内亦動く雷聲出る聞一々此尊像ハ敵と擁護  
一御方と罰一々佛もま名経自性の理を忘る一妖驗も色成  
変トく呼まれば山名父子も心中穏おる陣替とぞ聞へる

惣門

南の方表門にて西の方横門なり此西門も江州志貴郡膳所城主  
本田俊次彦再興あり此表勝門の梁釘

八幡宮

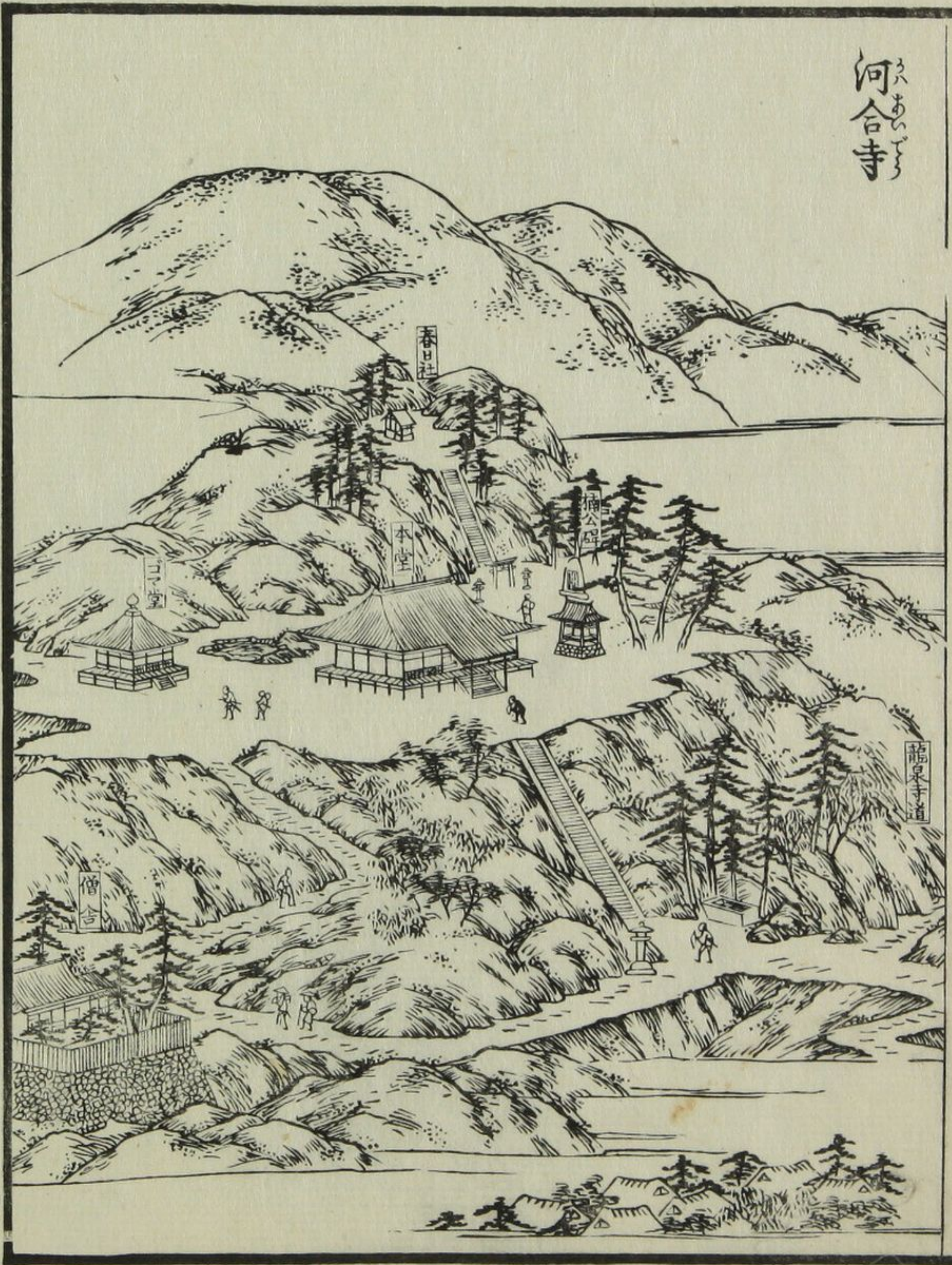
觀心寺西の門内傍の山上あり牛頭天王と併せ祭る近隣七ヶ村の生土神也

威古佐備神社

甘南備村より當村の生土神とい此地名川郡小属に  
母式神名帳出



河合寺



寶珠山河合寺

河合寺村の山中あり真言宗

本尊 千手千眼觀世音

長凡壹尺五寸許 膠土金胎兩部 大日尊又不動明王  
毘沙門天と安八楠正成の守本尊ありとぞ

鎮守春日神社

本堂の後の傍あり當村の地主神あり例祭七月十八日

護摩堂

本堂の右の傍あり不動觀音  
多門天王と安八

鐘樓

本堂の左傍あり  
惣高凡九尺巾凡二尺七寸 臺石高凡八寸

河合寺碑

堂の左傍鐘樓の辺あり自然石 惣高凡九尺巾凡二尺七寸 臺石高凡八寸  
銘南郭先生筆 鳥石山人あり 寛保二年秋八月建 其銘云

河内狹山梶子君采以邦大夫世采其封南河合邑邑有河合寺  
邑名焉記曰古者 皇極帝二年勅建列朝相繼奉信增脩以至  
南朝取爲崇觀與州之觀心金剛兩寺屹爲三大刹勅有數奉禱  
事勝國之亂諸閣壞廢大半而其國宜及楠氏所令手書至今藏  
鎮焉梶子之立碑於此爲寺觀微乎存乎曰否爲尚楠氏也何以  
尚之爲楠氏遺愛也古者楠氏盡忠乎興國正平時南北戰爭數  
十年矣誠節貫天地知略蓋四海恢復之功雖不成全其子其孫  
三世志業不渝實與南朝社稷相終始焉天下後世至于今時莫  
不感激出涕喜言其事焉是爲遺愛也爲楠氏遺愛衆矣曷爲獨  
於此河内與泉攝當其時楠氏世守也前此攝有湊川碑泉則未



聞焉爾而河内其所基據遺愛尤存金剛千阜城趾也何以不碑  
焉晁子曰吾嘗略行金剛千阜一石不存噫蓋竟外爾蓋河合碑  
則晁子遺愛乎我也遺愛乎我者遺愛乎己也因祖之所遠聞而  
石乎私土甘棠之遺焉往而不愛以君子之爲亦有樂乎此也楠  
氏之功德天下後世至于今時莫不感激出涕喜言其事焉所見  
同辭所聞同辭所傳聞同辭是謂口碑備矣不必具列其事則不  
獨其遺愛也寺觀雖微乎存後此以楠氏重則楠氏之亦獨遺愛  
於此也此立石之志也

寬保三年秋八月服元喬撰烏石書晁泰亮立

文の上篆字として横行小河合寺之碑し書以下ハ菊水の摸擬と鐫以

觀音真應集云

河内國錦部郡河合寺ハ皇極天皇の二年小菟我入鹿勅と奉つて建立せし行  
本尊千手觀音並ニ金剛藏王ハ自然湧出の靈像なり余後天智天王藤  
鎌足小沼く寶塔と建立して無量壽如來の尊像成安置一又聖德太  
子御作の藥師と大安寺より移し安置一並ニ佛舍利不動大日如來不  
空罽索の像亦成安置一と比丘八人と度く朝饑暮悔曾て怠る事なく

膏腴の田と施へて永く粥濟の料成供と給り後小高祖弘法大師遊化  
の節丹生高野白山八幡吉野熊野ホの神と觀清して鎮守と給り奈  
後代の天子崇敬し給ひて寺領と寄附し給ひて論旨院宣市百餘ありて代  
天伽藍ありしやと然る小許多の星霜を経て廢趾となり僅に存る堂舎之  
も雨洩りて本尊と浸びし及び時正保年間靈驗の依りて領主のれと再建のりて聞ゆ

西條川

水源四流あり一和州大澤嶺の西より流きて石見村より石見川とて入  
一紀見嶺の北より流きて石佛村より石佛川とて新町と經て三日市川と入  
一八九重峠より流きて岩湯山の麓より賀田村と經て石佛川と入  
一八藏王嶺より流きて龍の畑日野高向上原と歷て長野より唐川より流きて西條川と入

諸越橋

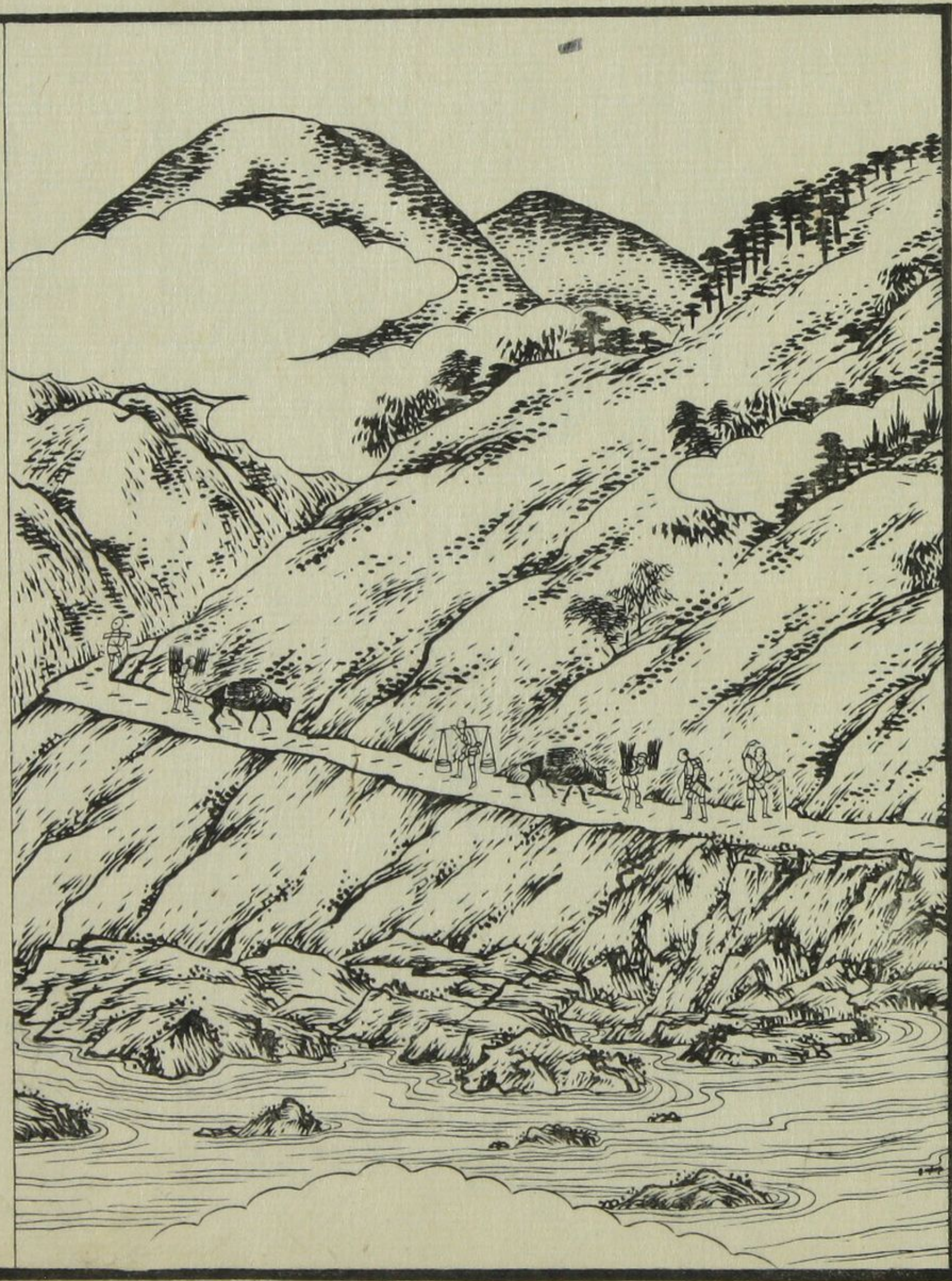
河合寺村より長野村に架け流きて右より西條川とて未だ石川小會とて所より然れ  
ども此地より西條川と號する小橋をめぐりての橋と俗に言ふる日やりのりる  
長十二間許中二間とて組上りて橋柱より上丸本とありて土とありて世不  
土橋と號するものより兩岸左右風景なり

金胎寺城趾

城趾あり川の東の方小高く聳り山上あり建武年中南軍ありに據る城十七  
の其二なり  
實正年中畠山義就と又つて此の地に金胎寺古跡あり  
横山村西條川の東岸より其かたりの川辺に巖の間より湖の瀬ありあり  
岩の色とて黒く尋常の岩小異なり朝望し滿干のりて是風土の奇あり  
岩の烈々間凡七八間をめぐりあり

横山天神祠

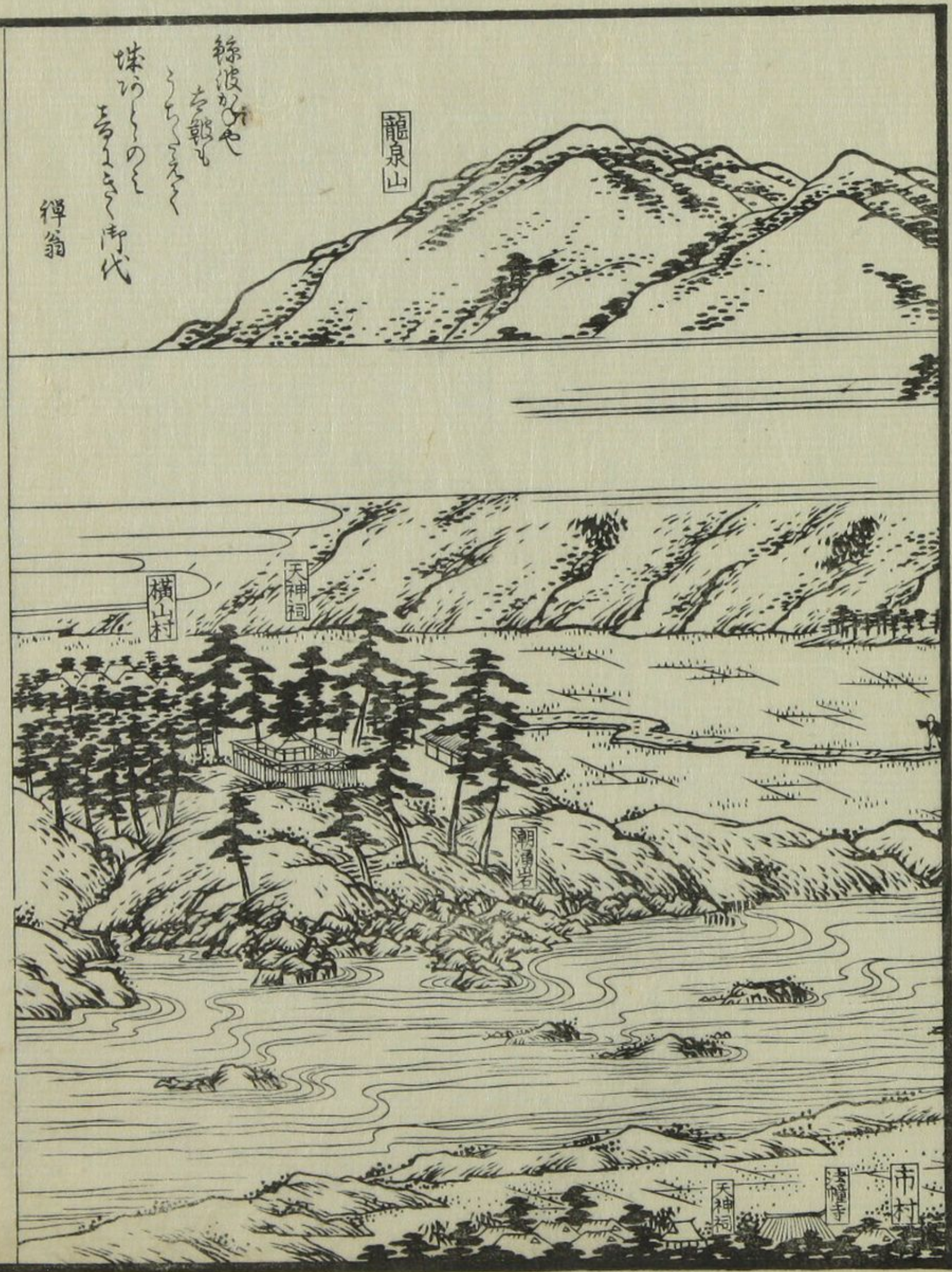




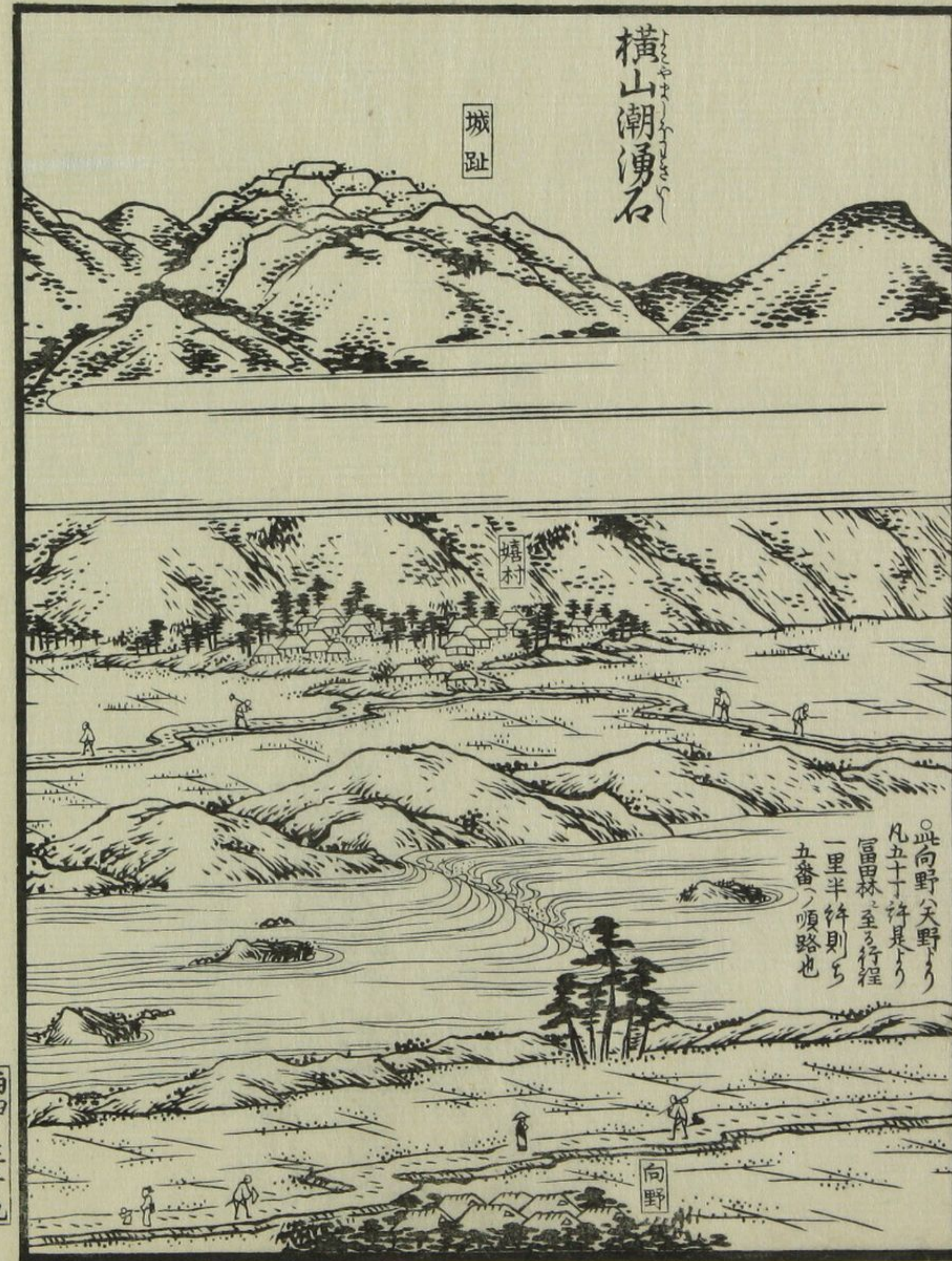
西條川諸越橋

菅原子影  
乃於此也  
再左





練波のや  
 を龍山  
 横山村の  
 市村  
 禪翁



横山潮湧石

此向野天野より  
 凡五十許是より  
 富田林に至る行程  
 一里半許則ち  
 五番ノ順路也



牛頭山龍泉寺醫王院

龍泉寺村より古義真言宗此地石川郡一属

本尊 藥師瑠璃光如来

長壹尺五寸 聖德太子作  
日光月光十二神將左京列下安

脇檀 左 大聖不動明王

弘法大師作  
長一尺守許 同 右 毘沙門天王

龍泉の城の守護の尊天

鎮守威古神社

今牛頭天王と稱し本堂の左の後より當村兵甘南備村の生土神とい  
例祭九月九日 延喜式神名帳出

善女龍王祠

本堂の後の西より祠の内井の俗雨壺  
とて早天の時雨を祈る靈驗あり

行者堂

本堂の左の前より  
役小角の尊像と云

觀音堂

本堂の右の前より

辨天祠

觀音堂傍  
地の中嶋有

大門

今大發の金剛力士の西像と  
安弘法大師の三禮の作と云

寺記

此寺は推古天皇二年獲我馬子大臣勅をうけて此佛宇を營んん

然る小惡龍池中小棲ぐ人民と腦以馬子神咒と誦し事一七七日惡龍威

驗不恐きて此地と飛去る此時水涸る事十余町 帝あり梵刹と建て十二願主と架

して群類と利せんん厥后次第水脈乏く獲る人あり空しく荒廢弘仁

十三年正月八日弘法大師此來り伽藍の荒蕪と嘆ひ善女龍王と祭り又辨財天

と勸清龍池と埋て精舎と再營一の茲おきて淳和帝勅して正二位中納言

冬緒郷と奉行し勸願寺とありぬ雨より密風城内に涸れて再び宗儀嚴整榮

龍泉山城址

龍泉の山上より山頂より方四町許の城地なり  
城形今小頭然り其中千人隠すと  
りつりの南朝正平年中楠正儀和田正武の據り南方の要害とい又寛正四年  
にも高山義就の千人隠るる地形窪して伏兵といひ無双の所故に

太平記曰

大和河内宇多宇智郡の兵千余人と龍泉ヶ峯一屏と塗まて櫓と搦せて見

せ勢もてて置るる縁と云  
是則ち南朝正平十四年の事して北朝延文四年にゆり  
楠在馬頭正儀和田和泉守正武小俄に集り行り

以善女辨天の橋の辺に龍燈のやれ寶華萬歳と祈りて小六種の供と一甲と

二塔と寺で月と西部の法と修り水に肥て甘露の味とて鳥に馴く密咒を誦し

堂塔山門鎮守の神祠寶庫より大師書造の經疏佛像多し子院廿五宇小建べり

今小大師の古蹟と御住坊といひ影堂の真如法親王此室と音信ぬい

かかろり達磨と志まると君おれ陀多湯まてて至るなり  
弘法大師

一盤石の靈水常し其上に涌と其下入南の井筒あり大師八龍と掃て手つ

ら是は佐りの早天と雨を祈る験なり或時當山の本尊小黃門定家郷立願有

十のちり二はらひ清くくみぐけぬるの光とどり  
定家郷

右當の寺記昔より傳ると其筆ハ正に後賢順郷 再中發權大補康致朝臣とて傳ふ



龍泉の城、和田楠相謀つて初大和河内の兵二千餘人と竜をささけりけるが寄手敢  
 て是と貴人をもささけり。間かて、徒小勢を置て、何せん打散してこそ野軍を攻て  
 龍泉の勢を比呼下してこそ、もめ野伏も百人たり見せ勢を残り、此の本は指  
 彼の弓蔵の端を小旗計りと結つけ、尚も大勢の竜をささけり。體と見せり、二十山の寄手  
 是と見て、あ駉一四方手とささけり。山此の大勢の龍をたんとぞ、何る鬼  
 神とよ言責落はへる者、水はとく小言恐まて攻んと言人一人も、只従一旗  
 ころりと見上て百五十餘人をささけり。或時土岐桔梗一揆の中、此中才覚ありり  
 老式者龍泉の城とほく、守り居りり。其軍勢を結つて曰く、太公が兵書  
 の壘虚篇、其壘上と望む、飛鳥驚るれば必く敵作つて、偶人を為まて、知  
 る也と云つ。我此西之曾相近つて、龍泉の城と見る、天に飛鳥、林に飯る鳥、曾く  
 驚る事あり、如何と云、是は、大勢の龍をささけり。體と見せて、旗をささけり。此彼も置り  
 と覚る、そのや人、地の勢と交へ、此一揆をささけり。向て龍泉と攻落、天下の  
 稱嘆、小備んと言、れ、桔梗一揆の衆五百餘騎、皆あさり、とぞ、同トありき。

和田楠龍泉山虚軍と  
 構て二十山の寄手と欺



本朝通紀ニ云  
 大和河内守守智郡兵  
 千餘人構岩龍泉峯超  
 高槽壘石壁、景觀章為  
 見勢、於是京兵、楠和  
 之勇盛、且見城溝之堅固  
 而不欲攻之、徒重圍諸城、  
 經數月云



龍溪山明王寺

龍谷より又竹谷とも云真言宗此地錦部郡に属す

本尊 不動明王

弘法大師の作 巖山の城中守護の尊像 巖山此地の上にて今金胎寺の城趾

鎮守 白山権現社

本堂の右の後上方より

籠堂

祈願の禪人泰龍の宿所 本堂の右の傍あり

傳云弘法大師龍泉山御修行の初國家平安の祈禱して作らせの尊像あり  
威相凛々として大盤石の上を立せの實殊勝の靈佛あり尤往古上る巖山  
の城中不安に今其地と堂壇と号然る小延文の乱とて將軍足利義詮公龍泉  
山と攻めし時兵火の爲に如盤のこけに焼失然るも尊像は恙なくして世に  
存る後世此に安置はく云今尚應驗新ありとて河泉とて大和攝津及び  
遠近の貴賤平日小病する事間断か殊更厄難病苦患する者八籠堂小  
宿して終夜真言と唱へ昼終日堂と周して祈念一香とたさ花と供して  
信仰する事夥し鎮守白山権現慶長五年庚子九月八日の勸請と聞也  
巖山の城實正元年島山義就が小槍籠り島山政長と戦ひ勢い猛りて金胎寺を出城をかくる事あり  
あつて籠城し及び一ヶ晝をこしやど金胎寺と捨て去る巖山より其のち巖山とも  
明らなく高野山と志のび又杉川にて政長とて終に熊野の奥に蟄ひと後太平  
紀小く見こる

人麻呂古跡

錦郡村新音寺より堂前飛壇の石ありて人麻呂といふ  
則ち此地錦郡山あり

夜もとがうらうらがてうらに焚りの錦織山に妻木とたり

折本人麻呂

河内志曰按天平十九年有河内國人阿保人麻呂蓋此人乎

錦織山

稱音寺

人麻呂塚



當寺本尊ハ  
聖輪觀世音  
として弘法大師の  
真作と聞也



按河内志云阿保人麻呂續日本紀天平十九年秋九月之條

河内國人大初位下阿保連人麻呂錢一千貫賜之

又天平勝寶四年之條正七位下山口忌寸人麻呂為遣新羅使

同神護景雲元年春正月之條石川朝臣人麻呂又阿倍小殿朝臣人麻呂

りり石川の人麻呂河内國人ありん次寶龜八年春正月從五位上石川

朝臣人麻呂為伊豆守之同時外從五位下陽侯忌寸人麻呂為東市正

同從五位下賀茂朝臣人麻呂為負外少輔又出雲臣人麻呂りり續日本後紀小文部

人麻呂伊蘇志臣人麻呂りり玉傳深秘抄田口人九玉傳抄山田人麻呂抄本人麻呂

おりり玉傳抄平城天皇御宇仲魚清年之哥人姓名を改めて抄本人麻呂とせり

あまのつる雁の使いりりり茶良部都こつてやえん 續人ありん云

佐伯宿禰人麻呂類聚玉手人麻呂山城史生上道人麻呂兼粟臣人麻呂

郡光明寺と建立せり人也如此同名として異人多し錦織山の古跡づもの人麻呂と云ふ

心建る所の標石も抄本人麻呂と勅其證りりり記とるりの手末傳に

二十山

錦郡より北ありて二堆の丘山あり是と二十山とて其中小村民りりて二十山村といふ

太平記卷二十四云

去程足利新征夷大將軍義隆朝臣延文四年十二月二十二日都て三て南

方の大手へ向ひりり中畧同五年二月十二日彼陣の勢二萬余騎と住吉天王寺へ入

替させ後と心安く歸らせ先陣の勢二十萬騎金剛山の乾一當りり津山

打上て陣と取敵味方其間い僅一五十余町と隔りりり閏四月廿九日の曉枯梗

一揆五百余騎忍びやりり二十山下りてりりり篠目の明とる露の結まき龍泉

の二乃木戸口推し同音小時とてりりり細川相模守清氏と赤松彦節

範實と二十山陣所と双々居りりり龍泉の時の聲と聞てありりり人

前と懸らまゆりりり城切て入んりりり事又一大事ぞ夫とてりりり真の先鋒と

言りりり馬小鞍とけ旗差のりりり程とそ有りりり相模守と彦五郎と鑑

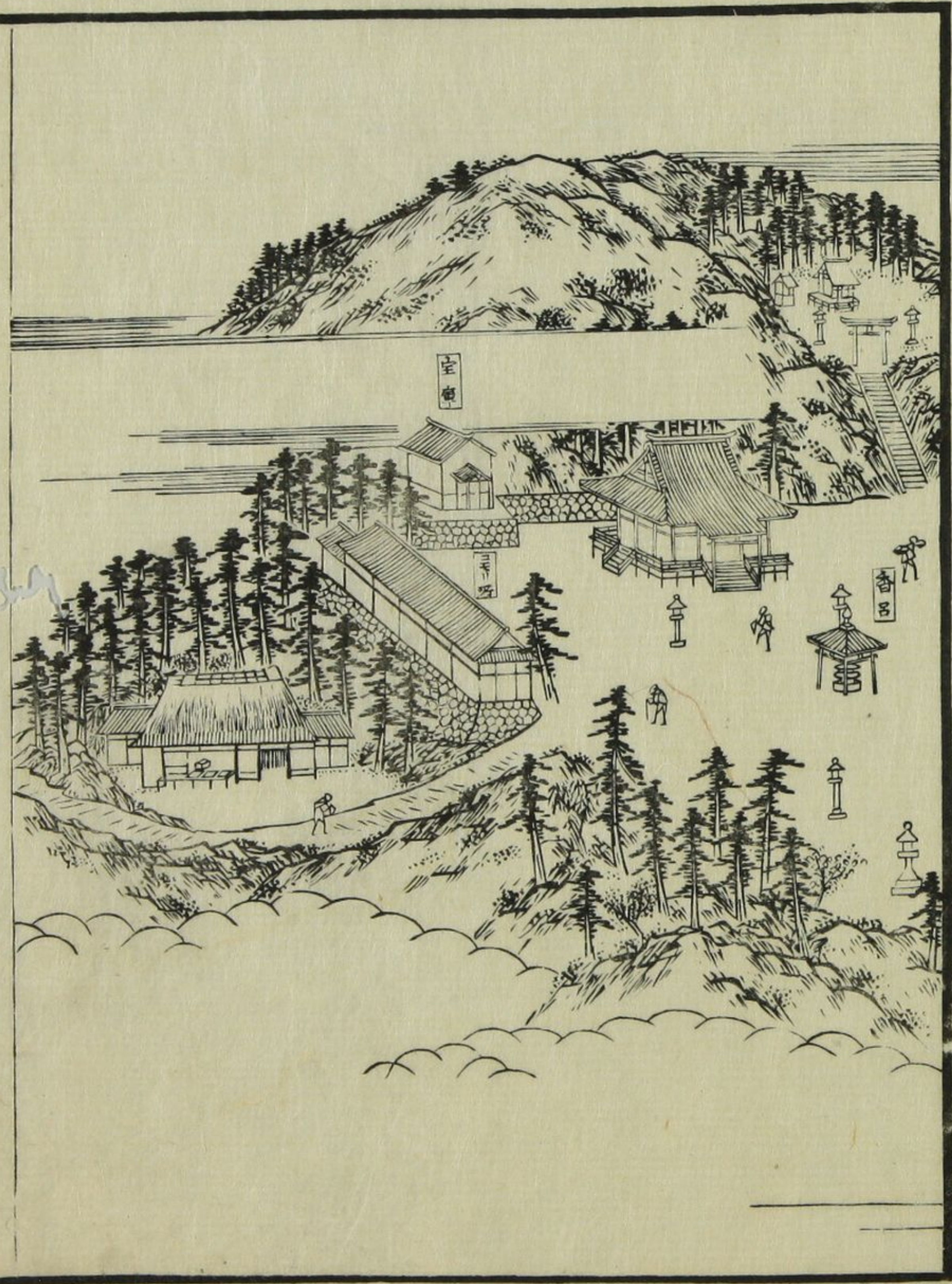
とてりりり肩に投りりり道高段がりりり龍泉の西の城高櫓の下りりりり

錦織神祠

向田村あり此所の生主神とて土人爾吾里宮天王神と云

此地はとまら街道あり





龍溪山明王寺



富田林

石川郡小属以南河内に於ての都會の地あり天野より此地まで凡噸路二里許是より五番葛井寺ありて二里余あり

當地往昔ハ廣に野として富田芝と号せしが天正の頃公命よりて市店建つたて繁昌の地とある故ハ高家多く特に水勝を善と以て酒を醸する家數多あり又農家の庭ハ葡萄を栽て作る事一圓あり其味ハ他を勝りて甘美あり小より名産として尚葡萄酒を製して世に弘む初秋の頃ハ棚をまどる葡萄鈴のてらありて最好みとて思ひせしは

本草綱目葡萄ハ漢張騫西域よりして還て始めて此種を得てて而して神農本草小己ハ葡萄より則漢より前ハ龍西ハ舊有る但つて園に入る耳と葡萄實甘く平して儲る其能氣と益力と倍し志気強く小便を利便瘡瘡出さぬと食して可しと言ふ

興正寺懸所

富田林あり京師興正寺の輪番所あり本尊阿彌陀佛ハ春日佛師の作りて長三尺あり腹櫃ハ親實上人真向の御影と安ん

當寺ハ應永年間ノ建立てて永祿の頃足利義昭公織田信長並びに家臣柴田佐助等の古燈文あり興正寺十四代燈秀上人再營して此に隣村毛人谷小

寂に今其地ノ墳あり門徒をまじと祖師山と称す

寶海寺

新堂村あり則ち街道右の方あり本尊十二面觀世音安阿弥の作長壹丈五寸

栗ヶ池

同村あり往昔聖武天皇御宇にせりかかん圃也

名物新堂籠

同村に於て製りて故一名ハ果實麻瓜の類とて市に出れば籠籠りて迎國つても是と用ひ村中ハ籠職の家多く俗ハ籠屋町と号するあり

和爾池

日本紀云に徳天皇十二年冬十月造和理池築橋野堤

和爾神社

同村和の池の西五丁許あり當村中ハ街道より右ハ鳥居あり左ハ本社あり建水分大明神の額と掲ぐ俗下水分の社と云往古ハ義久具留御玉神社と号す

嘉祥二年十二月授從五位上

迎隣六ヶ村の生土神あり

櫻井

同村和理の池の二町より北田圃の中あり清烈とて甘味あり此水ありて里の小名と櫻井と云り里人曰世々名を以て其所定ありて十五ヶ年以前早魃の時其所を得たりとて

刈雁神社

西坂田村あり街道の左の方山あり延喜式出今王の宮といふ

戸苅池

藏内村あり街道の左の方の二村あり在中の南の端ハ池あり則ち是といふ推古天皇十五年秋七月此池を作ら唐子二百畝ト云土人今戸雁戸といふ

寶壽寺

西浦村あり禪宗黃檗派也本尊阿彌陀佛左脇白堂盧和尚像右脇檀小毘沙門天と安ん當寺ハ頗る舊地として廢せしと中興白堂盧和尚實延年中の再興なり

本堂額

楞伽寤禪寺

海雲七十八翁百拙書 當村ハ則ち噸路の街道に

清寧天皇陵

同村あり坂門の陵に在り白髮の山陵といふ此天皇生をりす髪白く其ころ白髮の帝 往ハ傍小園在り右の陵といふ



清寧記曰 白髮武廣國押和日本根子天皇清大泊瀬幼武天皇雄

第三子也母曰葛城韓媛天皇生而白髮長而愛民五年春正月

天皇崩冬十一月葬于河内坂門原陵此地古市郡也

輕大臣墓

輕墓村乃則ち街道の傍にあり輕の大臣の墓あり故に地名と云ふ

和漢二才圖會輕大臣墓麓と輕墓村と号く然もとも輕大臣といふ者ハ維や

日本紀等載は云々乃此大臣の故事ハ下學集及び神社啓蒙亦出年久

言傳乃說乃當所の墓乃比和州高市郡法輕寺丹波桑田郡輕神社

皆輕大臣の名と云ふ

一説輕皇子の墓乃按人皇二十代允恭天皇の神子小本梨輕皇子と稱する

乃然も不義の事ありて終に殺され乃其罪輕なる事乃墓乃此の築

乃の理乃又二十代孝徳天皇の御名と輕皇子と乃此帝の山陵石

川郡山田村乃諸陵式乃出る所乃尚是とも有べ

金剛輪寺覺峰師説乃此陵ハ日本武尊乃所謂此地伊岐谷乃白鳥の陵

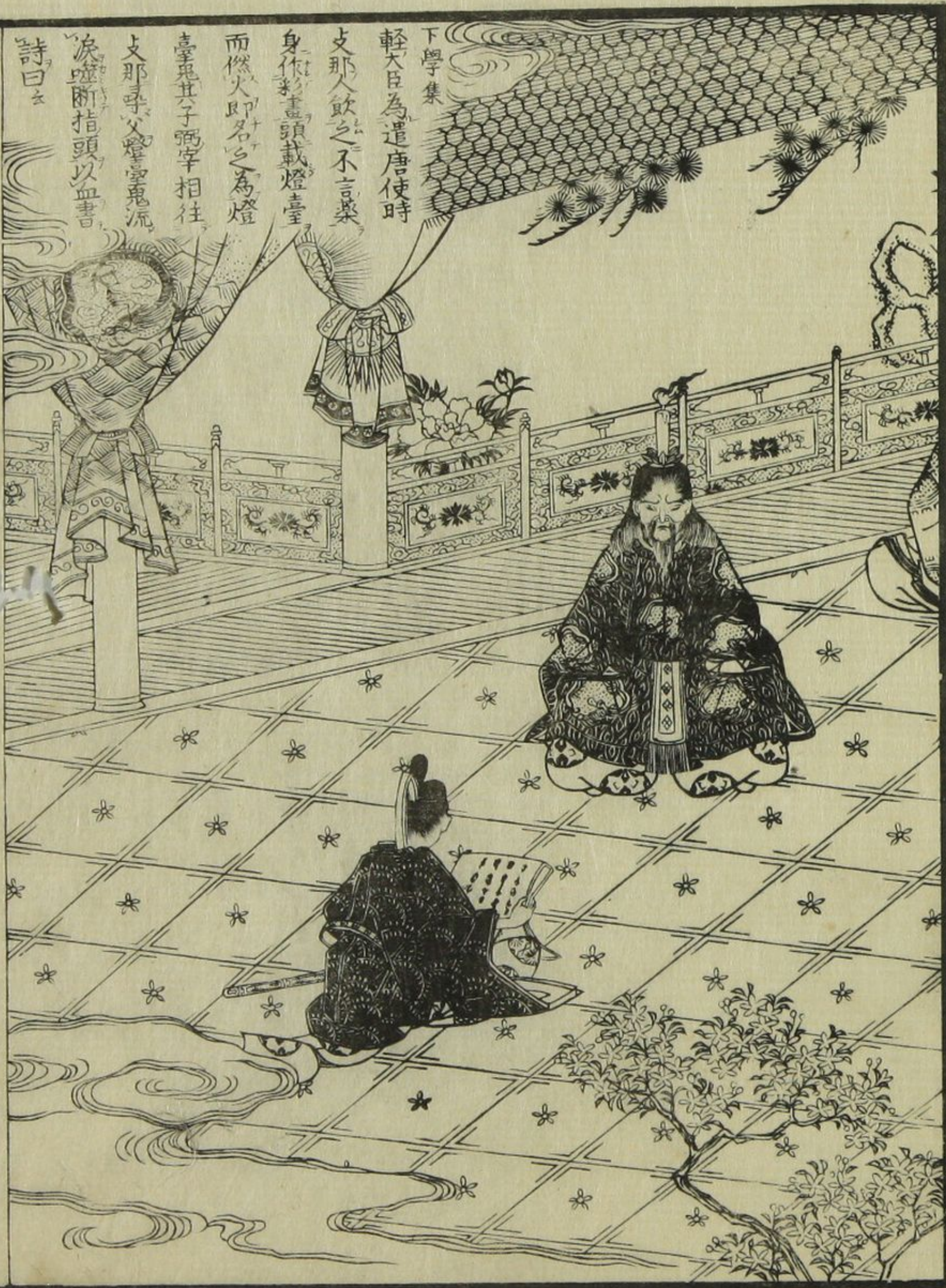
おん其容全く帝陵の如河内志にも輕墓と記する事ハ深く考へて地系  
泥む者乃此考所理乃然も又輕墓と地名乃事乃是  
疑乃此地乃輕の墓と尋乃人乃故乃輕大臣墓と出  
せり是ハ唯通用乃隨乃而也

昔輕大臣遣唐使と為し時支那人此大臣乃不言藥と飲乃身乃彩畫と  
作乃頭乃燈臺と戴乃火と燃乃即乃名乃燈臺鬼乃其子乃義  
春衡又唐使乃時乃齋明天皇二歳丙辰乃唐使と貴重乃夜乃及んで  
燭乃鬼燈と出乃鬼燈遙乃春衡と見て我子乃夜乃及んで  
指乃指の頭乃血乃以て書乃曰

我元日本華京密 游是下家同姓人  
為子為翁前世契 隔山隔海戀情辛  
經年流淚蓬蒿宿 遂日馳思蘭菊親  
形破他郷作燈鬼 争歸舊里寄斯身



下學集  
 輕大臣為遣唐使時  
 支那人飲之不言菜  
 身依彩畫頭戴燈臺  
 而燃火即名之為燈  
 臺鬼其子嗣宰相往  
 支那尋父聲冤流  
 淚嗟斷指頭以血書  
 詩曰云



輕大臣唐土於  
 難小偶て燈鬼ある



燈の影耻く身も色も心も思ふ闇に悲しかりり

春衡是と見く我又もく知る遂に燈鬼と求りく日本に帰るの日颯州硫黄が

鳴り没其葬る所の地と名けく鬼界しつ

春衡のいま先の大目づきの時の人として支國史諸實録に見るしとらふ一既に女光る

青龍山野中寺德蓮院

野々上村より 真言宗

此地丹南郡

本尊 藥師瑠璃光佛 長三尺七寸 聖德太子の御作 龍護殿の額と掲ぐ

觀音堂 本堂の右の後あり 本尊聖觀音八聖德太子の御作 長四尺五寸

地藏堂 本堂の左の後あり 本尊地藏尊ハ 經藏 坊中の庭あり一切經と納む又

鎮守八幡宮 本堂の西の山上あり 揚枝井 行基僧正揚枝して堀り井しり

瑪瑙石 方丈の庭一有又本堂の前辨財天の祠の座石ハ又一石ハ野村の

鐘樓 本堂の左の傍あり 伽藍礎石 境内に許多あり

夫當寺ハ既戸皇子の関基し四十六院の中蕪我大目の草創あり往昔

七堂伽藍巍くくる靈場あり中頃の兵火に燒亡し荒廢の後久く礎乃

ありと寛文の年間阿闍梨覺英の本願よりして慈忍惠猛和中興して戒

律の道場とあり今律宗一流の本山輪番所なり此慈忍律師ハ秦氏して當國濱

良郡の人なり 別院ハ寶泉寺といふ古刹あり近來再興して

野中神祠 同村あり今龜ヶ池弁助天と稱し子安觀音辨財天ハ堂内に安ん

二代實錄曰貞觀十七年八月廿八日戊寅授河内國正六位上野中神從五位下云

埴土坂 此地野々上の邊より人皇十八代履中天皇の御時仲皇子ハ薨れ

羽曳山 又狹び野々山ハ麻錦部二十山よりつらねく丘山なり石川古市の西郡も連なり

仁賢天皇陵 野々上村の東に子とおヶ山といふ丘山あり是則ち日本紀ハ野々埴土坂本の陵あり

日本紀曰 億計天皇 仁 諱大脚字島郎弘計天皇 同母兄也

幼聰穎才敏多識然而仁惠謙恕温慈同御宇十一年秋八月

天皇崩正寢冬十月葬埴土坂本陵

野中山満願寺 野中村より太子御建管の地あり 真言宗 葛井寺の異なり



本尊 藥師瑠璃光佛 座像壹尺二寸 又十面觀世音立像 壹尺八寸

什寶唐畫佛繪 都合廿七幅

仲哀天皇陵 葛井寺の傍岡村の管内より所領長野陵ありと云俗名反正天皇の陵と

日本紀曰 足仲彥天皇 日本武尊第二子也母皇后曰兩道

入姬命同御宇二年春正月氣長足姬 為皇后九年春二月

天皇忽有痛身眼日崩時年五十二

神功紀二年十一月葬天皇於河內國長野陵云

長野神社 葛井寺の西南の傍あり此所の生土神なり 延喜式出神名帳志紀郡なり

第五番 紫雲山三寶院葛井寺

河內國丹南郡葛井寺村あり真言宗 葛井寺俗稱三寶院

本尊 千手觀世音 梵文會梵音觀世音の作 長四尺八寸 脇士地藏尊 正觀音と安ん得行基僧正の作 長五尺五寸

不動堂 本堂の西より大聖不動明王と安ん 菩薩堂 本堂の前西側より廿五菩薩と安ん

大威徳影向石 本堂の前より 鎮守社 牛頭天王と安ん 辨財天祠 鎮守社の傍あり 中島あり

紫雲石燈籠 聖武帝御寄附方丈の庭中より 室庫 不動堂の西小隣あり

業平屋鋪 方丈の軒の庭より業平朝臣造立の奥院の向趾也

大門 金剛力士の兩像と安ん 樓門あり

葛井 野中の森より今藤の森と云此地當寺の向跡なり 伽藍古趾 境内に古礎許あり

當寺ハ 聖武帝御願よりて建立の伽藍行基菩薩開眼供養の梵場

りり加々 平城帝の御願阿保親王再造の精舎大威徳天王影向不斷乃

靈跡金剛金峰兩山の肝心あり葛城縁起云葛井寺ハ葛木の西門也

本尊ハ梵文會梵音觀世音の聖作千手千眼觀世音菩薩御衣木ハ和州長谷

寺大慈の同木妙相端嚴と感應無雙の尊像二十一所巡禮の地緒佛轉

法輪利生の砌あり茲に明應二癸丑夏一國の乱をよつと兵火小羅りて樓

門中門に重大塔鎮守并業平朝臣造立の奥院等焼亡し畢ぬ然り

とこの本堂寶塔巍然とあり仍く衆僧願望緒檀那力

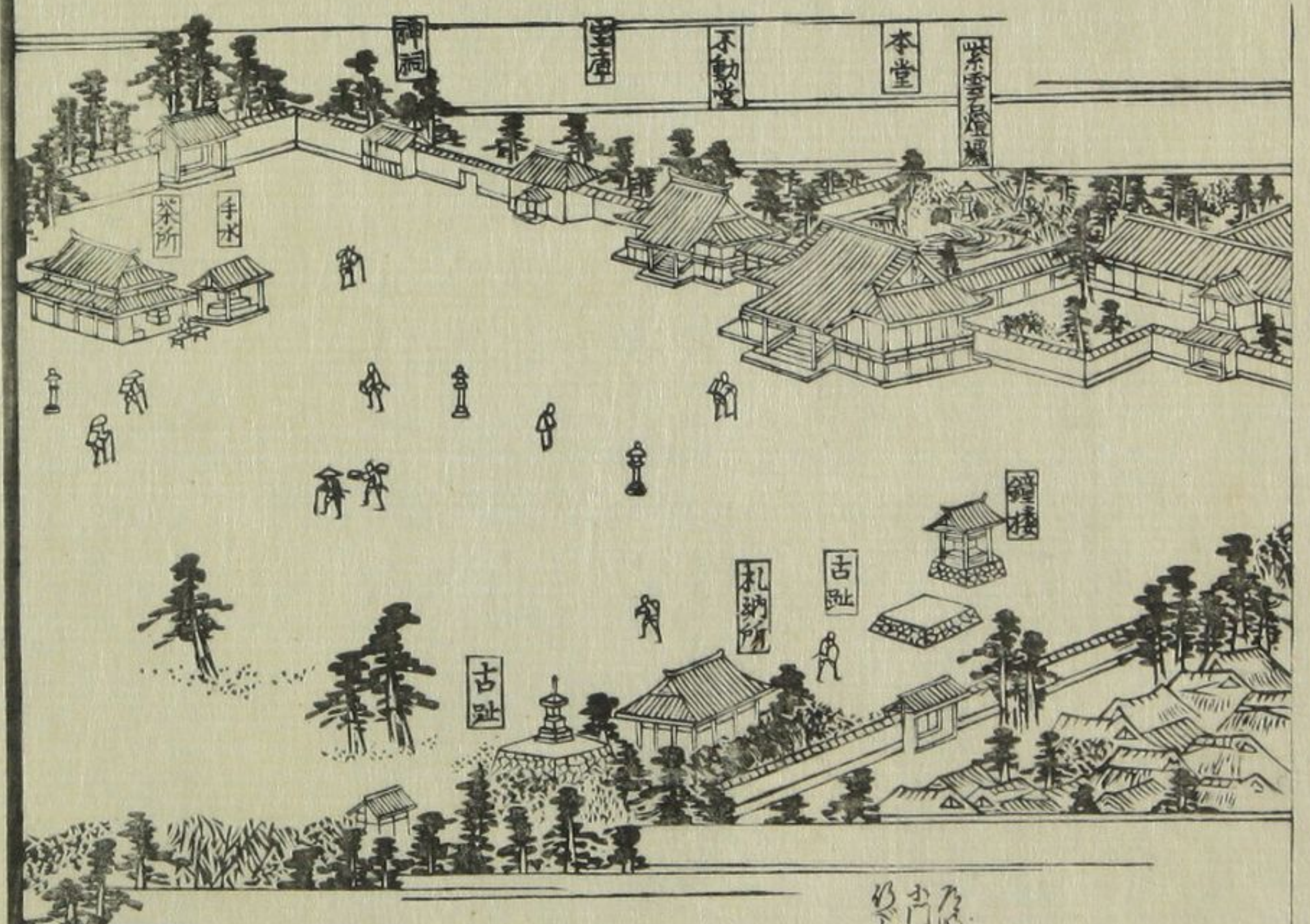
勸せし舊基小飯入又永正七年八月八日の曉大地震一寺滅亡本尊無恙

前蹤未闕希代の神變りり一刹伽藍の退轉ハ衆生攝化の方便あり



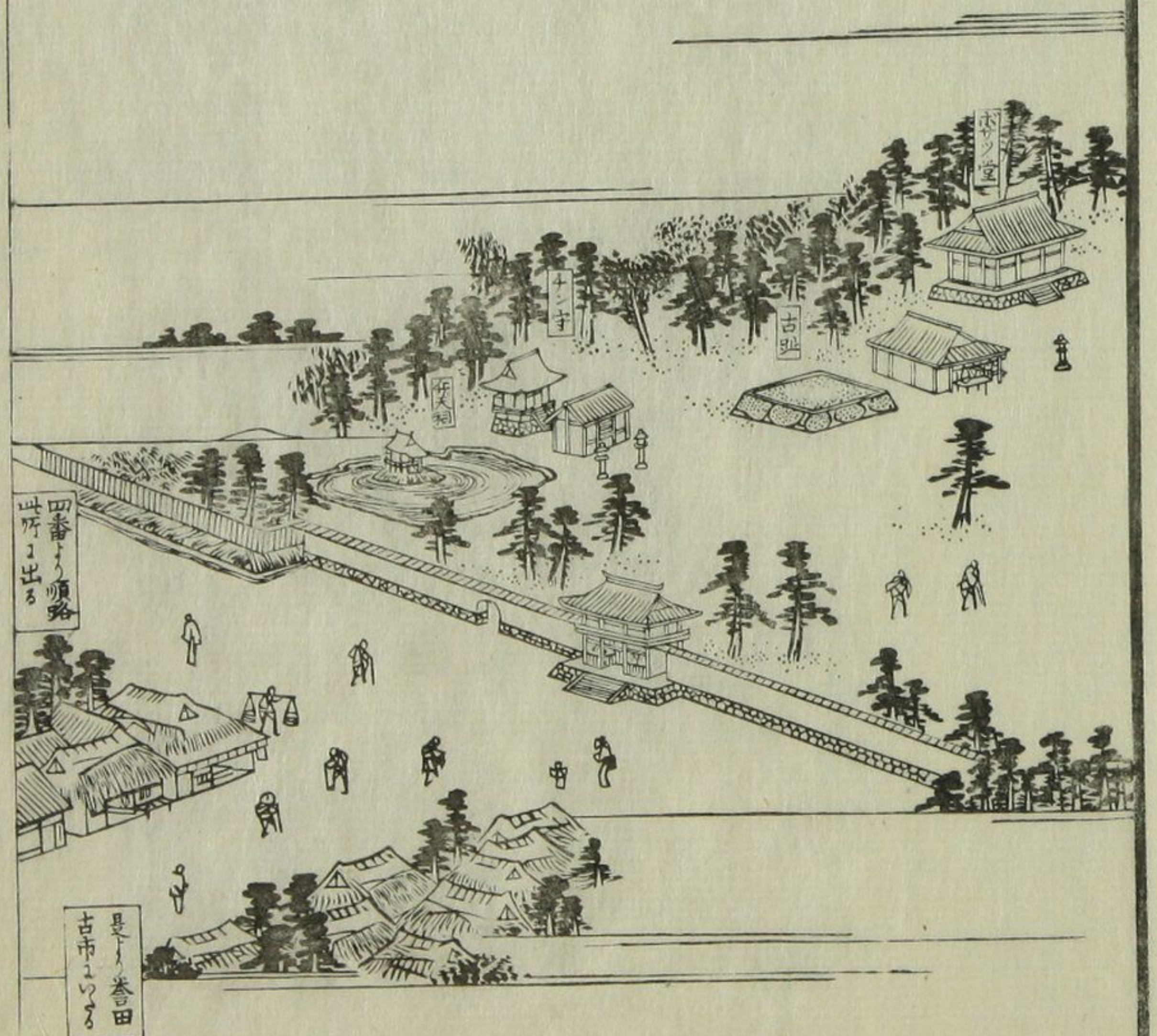
第五番  
葛井寺

詠哥  
あまのり  
かた  
あまのり  
あまのり



乃のまはれは城の  
まはれは城の  
乃のまはれは城の

法華普門品科註直説曰  
千手観音トハ過去速々ノ  
昔ニ千手光常任如来ト  
云佛出世ニ給テ観音此  
佛ノ前ニ出テ發願シテ  
云ク我ニ千手千眼現前  
セバ一切衆生ヲ度スベシト  
誓言願ニ給フナリ而ルニ誓  
願ノ如ク千手千眼ヲ皆  
悉ク具足シ給フ故ニ  
千手観音ト云



四番より順路  
此所に出る

是下ノ巻田  
古市ノいり



滅<sup>ス</sup>歎<sup>ス</sup>さの中<sup>ノ</sup>の歡<sup>ム</sup>びなり伏<sup>テ</sup>願<sup>フ</sup>人<sup>ノ</sup>宜<sup>シ</sup>加<sup>ス</sup>藍<sup>ニ</sup>再<sup>ニ</sup>言<sup>フ</sup>の志<sup>ト</sup>勵<sup>ム</sup>一<sup>ツ</sup>紙<sup>ノ</sup>  
半<sup>ク</sup>錢<sup>ノ</sup>の少<sup>シ</sup>財<sup>ト</sup>と耻<sup>シ</sup>所<sup>レ</sup>願<sup>シ</sup>餘<sup>リ</sup>く懇<sup>シ</sup>心<sup>ト</sup>運<sup>ズ</sup>ぐ一<sup>ツ</sup>夫<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>千<sup>ノ</sup>手<sup>ノ</sup>觀<sup>シ</sup>音<sup>ハ</sup>八<sup>ノ</sup>端<sup>ノ</sup>巖<sup>ノ</sup>  
の慈<sup>シ</sup>容<sup>ニ</sup>千<sup>ノ</sup>正<sup>ノ</sup>覺<sup>ノ</sup>の導<sup>シ</sup>師<sup>リ</sup>一<sup>ツ</sup>見<sup>テ</sup>一<sup>ツ</sup>禮<sup>ス</sup>者<sup>ハ</sup>永<sup>ク</sup>離<sup>ル</sup>之<sup>ノ</sup>惡<sup>ト</sup>趣<sup>ク</sup>速<sup>ニ</sup>一<sup>ツ</sup>二<sup>ノ</sup>世<sup>ノ</sup>の願<sup>シ</sup>望<sup>ト</sup>  
滿<sup>シ</sup>むごさ者<sup>ナリ</sup>依<sup>テ</sup>西<sup>ノ</sup>寺<sup>ノ</sup>紀<sup>ト</sup>如<sup>ク</sup>伴<sup>ス</sup>

永正七年十一月日

葛井寺什寶

後醍醐天皇綸旨二通 同和歌三首 松虫之鈴 真如法親王持物

楠正行菊水旗一流 楠正儀壁書一通

高越後守奉書 佐久間壁書一通

地藏聖觀音 照土前出 阿弥陀佛 惠心作 不動明王立像 智澄大師作

佛舍利 聖武天皇御寄附 十六善神 琢磨筆 大般若經全部

賓頭盧尊者 行基作 寺中伽藍古圖 土佐持監筆

寺紀云云々々明應二年山名と之好が兵火よりつて樓門鐘樓及び三重の塔

在五中將建<sup>ス</sup>之<sup>ノ</sup>具<sup>ノ</sup>の院<sup>ヲ</sup>とてあり焼<sup>レ</sup>失<sup>セ</sup>り然<sup>レ</sup>も本<sup>ノ</sup>堂<sup>ヲ</sup>并<sup>ビ</sup>寶<sup>ノ</sup>塔<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>  
思議<sup>ナ</sup>存<sup>リ</sup>時<sup>ニ</sup>又<sup>ニ</sup>永<sup>正</sup>七<sup>年</sup>大<sup>地</sup>震<sup>シ</sup>よりつて残<sup>リ</sup>有<sup>ル</sup>所<sup>ノ</sup>諸<sup>ノ</sup>堂<sup>モ</sup>皆<sup>レ</sup>倒<sup>レ</sup>ま<sup>リ</sup>も  
本<sup>ノ</sup>尊<sup>ハ</sup>於<sup>テ</sup>少<sup>シ</sup>も損<sup>ト</sup>給<sup>フ</sup>諸<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>奇<sup>ニ</sup>異<sup>ノ</sup>の思<sup>ヒ</sup>とち倍<sup>シ</sup>く信<sup>心</sup>と起<sup>リ</sup>十<sup>ノ</sup>  
方<sup>ノ</sup>有<sup>ル</sup>信<sup>ノ</sup>の輩<sup>ト</sup>勸<sup>メ</sup>り漸<sup>ク</sup>今<sup>ノ</sup>の伽<sup>藍</sup>と建<sup>ス</sup>せりと言<sup>フ</sup>也

一説云<sup>フ</sup>往<sup>ク</sup>昔<sup>ニ</sup>七<sup>十</sup>二<sup>代</sup>堀<sup>河</sup>院<sup>御</sup>宇<sup>永</sup>長<sup>元</sup>年<sup>一</sup>大<sup>和</sup>國<sup>加</sup>苗<sup>ノ</sup>の里<sup>小</sup>藤<sup>井</sup>安<sup>基</sup>  
基<sup>ト</sup>者<sup>ハ</sup>心<sup>極</sup>めて邪<sup>見</sup>して曾<sup>テ</sup>因果<sup>ノ</sup>の道理<sup>ト</sup>とち大<sup>ニ</sup>惡<sup>ニ</sup>無<sup>道</sup>の  
事<sup>ノ</sup>とばらる<sup>ル</sup>或<sup>ハ</sup>昔<sup>ニ</sup>當<sup>リ</sup>國<sup>平</sup>石<sup>村</sup>とつ<sup>テ</sup>所<sup>ニ</sup>來<sup>リ</sup>鹿<sup>ト</sup>獵<sup>シ</sup>て射<sup>テ</sup>殺<sup>シ</sup>山中<sup>ニ</sup>  
の寺<sup>ハ</sup>ありて是<sup>レ</sup>料理<sup>シ</sup>喰<sup>ハ</sup>ん<sup>ト</sup>僧<sup>侶</sup>大<sup>ニ</sup>驚<sup>カ</sup>さ<sup>レ</sup>志<sup>ハ</sup>く是<sup>レ</sup>制<sup>シ</sup>す<sup>ト</sup>  
つ<sup>テ</sup>も露<sup>ヲ</sup>も用<sup>ヒ</sup>終<sup>ニ</sup>は僧<sup>徒</sup>と縛<sup>メ</sup>ち<sup>テ</sup>佛<sup>前</sup>の經<sup>机</sup>と廻<sup>リ</sup>佛<sup>像</sup>と  
破<sup>テ</sup>薪<sup>ト</sup>鹿<sup>ト</sup>煮<sup>ク</sup>飽<sup>キ</sup>て喰<sup>ヒ</sup>余<sup>ノ</sup>の<sup>ニ</sup>縛<sup>メ</sup>ち<sup>テ</sup>僧<sup>侶</sup>の口<sup>ニ</sup>ち  
こ<sup>ト</sup>て喰<sup>ヒ</sup>を<sup>シ</sup>薄<sup>情</sup>斯<sup>ク</sup>後<sup>ニ</sup>安<sup>基</sup>と<sup>シ</sup>て俄<sup>ニ</sup>病<sup>ニ</sup>死<sup>ス</sup>る<sup>ニ</sup>妻<sup>子</sup>  
の歎<sup>ク</sup>言<sup>フ</sup>も更<sup>ニ</sup>あり然<sup>レ</sup>胸<sup>上</sup>の<sup>ニ</sup>依<sup>テ</sup>て二<sup>日</sup>二<sup>夜</sup>野<sup>邊</sup>に送<sup>リ</sup>て  
して置<sup>ル</sup>る<sup>ニ</sup>二<sup>日</sup>と過<sup>テ</sup>忽<sup>ニ</sup>甦<sup>レ</sup>生<sup>ル</sup>妻<sup>子</sup>大<sup>ニ</sup>悅<sup>ビ</sup>其<sup>ノ</sup>故<sup>ト</sup>を尋<sup>ル</sup>る<sup>ニ</sup>安<sup>基</sup>



涙と流し結て白我死して漫く商路と飛行と箭と射るごとく肝魂も身小  
 添ひ火焔来つて身と焼く熱事限りは今聞ひ地獄に墮ると懸りある  
 内已小地獄の門小近づけり今見ま百千丈の火焔燃上る罪人の叫ぶ声四  
 面よりして夥く其怖も事喻へん物色時小牛頭馬頭の鬼来つて我手  
 と引立行んとる所一人の童子飛来り給ひ鬼を制して我を伴ひ閻魔  
 王の前小至つて宣く渠が罪と赦して我共この閻魔王罪と勤めて曰此者公平  
 生小佛と輕め刺し佛像と破て薪と殺生とあはれ寺堂舎と穢れと逆  
 罪無間の底に墮せん事追るべし罪人と各童子重袖て宣く是に至極  
 の罪人もれぬ一本長谷寺回縁の砌造営の材木と曳て長谷寺へ入り  
 結縁せし者もま罪と免し一回娑婆へ還り給へと種くふとわい程冬  
 王漸く兼引のい坐と立ち我を召し汝と今一回娑婆へ還りたり自今以  
 後惡と制を佛果に至まし門前より拂せの斯也程童子と見  
 一方に對し如何ある御佛とてまの哉と尋る我則ち長谷寺乃觀



安基觀音の慈悲小  
 よつて地獄の罪科と  
 免がふ



音の海先達て堂塔建立の折人歩まれば信の志はくばりて木と運び芳  
々事と縁は此度救ひ得る事ありは是と忘る事なく安樂歸すと佛と念下  
善根とあはれと号て教のて思ふ夢の覺をじと一五十七物治りて今より殺生  
邪道と止佛の教を隨じと妻子と暇をりて直に頭を削りて出家の姿あり夫も諸國  
修行と普く觀音の靈驗とがうて佛道と勧め又長谷寺にわたりて觀音事奉り  
尚剛琳寺の觀音も長谷と同本同作あれ此も來ると堂塔の荒廢とあはれ諸國と  
勸化と再建と多る是とつて世人安基が苗氏よりて藤井寺と号りて斯る  
惡逆の者も觀音薩埵の助多しつて善道一故一且伽藍と成就せし  
末世の衆生不知りめん為維りて自ら藤井寺と言習ひ事是又觀  
音の靈驗と行あり又安基を任り所今尚長谷寺よりて藤井坊と号り  
あん言て 以上觀音真德集 觀音靈驗記真抄  
觀音靈場記見エタリ  
按る小彼唐の魯郡の孤女、麦畑の中にて括る觀音の像を拾ひ得るは夜小  
供養せ故火車地獄の苦患と脱き事觀音感通傳より見えたり和漢

域異ありとて大悲の利益最一回なる者なり  
又本尊と作は替文會替主敷の六當國石川郡春日の里の人なり故に此佛  
子の作らるる乃春日の作らるる世人春日明神の作らるる思ひ謬る事多し尚春日  
の里の條は委しく出せばうと思は  
縁哥 糸より頼とてわら藤井寺花乃臺は此也  
按る頼とてわら藤井寺花乃臺は此也高く立登る  
事叶はれ種々の樹木より登るの是と奇はるる續  
ねめれる藤浪もも續らる花の臺紫乃雲ホつても洞の縁と以て詠に  
問ねまらむむむむ藤花乃花乃ねめる心  
又泉州場の津乃金光寺の藤の花は養ありとて後小松院開りて禁  
庭移し植るをいれりて枯る帝夢の中和歌一首と傳り  
思ひきや場のうけ藤浪乃都花乃かほり  
御覽寤く後藤の精靈玉體は奏りて御感らつて御宸筆小此



弄と遊ばされ 御製と添れ 紫藤と寺小贈返さるる 斯に程に此枯木  
と四跡に植とるる 忽ち棠へ枝葉繁茂して元の如く 人感のまこと奇ありん  
とて是れ松よかれる 藤浪の祠の因よりて記し而已

順禮歌要解云系より頼と樹る 藤井寺と詠さる 他カ本願の心とよみ  
かへ先弘誓と大木に譬へ衆生と藤蔓に譬へるなり 古人曰松とて古葛ハ  
千丈の梢小上るこころ 今世の衆生ハ戒行の足腰たれ 藤の自く上るこ  
叶とるごとし 本願の大木とてんば上りかたれば 花の臺小上るこころ 意と縁  
給ふありき 紫雲、紫雲たあびれば 佛の来迎とあづかる 依意と含あり

古今 紫の雲乃るも一と見とせば 法は標は花咲こりし  
玉葉 紫は夕日明暮の赤白雲とて 川紫は色と見おさん 法然上人

葛井寺戰場 正平三年八月十四日 楠正行精兵七百騎とりて北軍の大將細川頭氏  
七十餘騎とりて大勝利と傳ふる古戰場なり

大平記卷第二十五

楠正行、父正成が先年溪川へ下りし時、思ふ様ゆき、今度の合戦

我必く討死とて、汝ハ河内へ皈つて君の如何も成せ給はんとの御様と見  
てて進らせしと申合り、其庭訓と忘き、此十餘年、我身の長とある  
と待討死せし郎従どもの子孫と扶持と何とも、父の敵と滅び、君の御  
憤と休ら奉らん、明暮肺肝と苦しめてを思ひ、先陰過安られ、本年  
續つて正行已に二十五、今年、殊更又、十二年の遠忌、當り、六供佛施僧  
の作善所存の如く致して、今命惜も思ふ、其勢五百餘騎と卒し時  
に任吉天王寺辺に討ち、中島の在家少く焼拂ひて京勢やあつし待  
り、將軍是と聞かひて、楠が勢の今降あり、今こそ有らめ、是邊境と  
侵し棄つて、洛中驚と騒ぐ、あそ天下の嘲呼、武將の耻辱あり、急死馳向  
て退治せし、細川陸奥守頭氏と大將とて、宇津宮に河入道佐木、六角判  
官長左衛門松田治良、左衛門赤松信濃守範資、舍弟筑前守範貞、村田奈  
良、崎坂西坂東管家の一族とも都合に千餘騎、河内國へ差下さる、此勢八月十  
四日の午の刻、小藤井寺まで着つり、此陣より楠が館ハ七里と隔てられ、



藤井寺合戦

本朝通紀之傳  
 曰正平二年秋八月  
 細川陸貞守頭氏  
 躬率七十三百餘  
 騎將赴千飯破次  
 于藤井寺  
 正行以七百餘騎  
 卷旗歐敵直進  
 突戰所伏奇兵  
 相應自前後



搏擊頭氏之兵  
 大驚駭不戰而  
 走正行遂北六里  
 斬首四十二百十餘  
 頭氏漸脫歸正行  
 止兵直詣朝天皇  
 召見歎曰卿繼父大玃  
 以制強敵是父是子  
 王室之干城也拜正行  
 為左衛門督十五





縦ひ急ふ寄るも明日明後日に向を寄らんと京勢由断しく或  
物具と解て休息し或馬の鞍と下して休り好く譽田八幡宮の後山  
陰に菊水の旗一流き乍の見く胃の兵七百余騎まづし馬と歩ませ  
打寄りすりや敵の寄る馬小鞍とけ物具せしと闘さ色々所正行  
真前へ進んで嚙て懸ゆる大將細川陸奥守甲と肩小懸るれ未上帯  
しもし得ば太刀と帯と隙もり見へ給ひる間村田の一族六騎小具足  
をりて誰が馬もあひひりしと打乗て雲霞の群らて扣る敵  
の中へけり火と教してぞ戦いするれ續く味方あれば大勢の中  
取らぬも村田の一族六騎二所とて討まきもあり其間大將も物具か  
り馬小打乗て相順ふ兵百余騎まづ支て戦うり敵小勢あり御方  
大勢り縦ひ進んで懸合とすもあひひりし退く兵と無せ此軍  
中京勢とて負もあひひりし四國中國より馳集りる葉武者前支  
て戦ふ後ハ捨鞭と打て引る間力り大將も猛卒も同様とて落

行々勝し乗る時とつりけ恨るか多追らる間大將とて天王寺渡部乃  
辺まで危うく見へり伏六角判官舎弟六郎左衛門返し合せて討まに  
ちり又赤松信濃守範資舎弟筑前守二百余騎命と名替て討死せ  
と取てらへし七八度まで騙留る戦ひりる命良崎も主従三騎討ま栗  
生田小太郎も馬と射られて討まきり此等小度く支へ敵さる追り  
多れ大將も士卒も危き命と助つて皆京つを敵とすもあひひり云々  
○右藤井寺より第一番壺坂寺に至る直道古市より上の太子春日山と歴  
て竹内峠と越新庄御所に至る土佐の城下と過て壺坂は循行行程凡八里  
許然も此辺名所四蹟まづあれ新道と旁して巡覽せんものと勸む  
譽田八幡宮古市に赴く道あり道明寺、葛井寺の東半里許より玉手  
山、大和川の向い圍り名高比小山の里、乾の方と僅小隔り浪花より葛井寺  
小指づの街道第四番より大坂へ出て此頃旅客必ら天正寺より子野  
小出り川辺小山と次く街道とつり尚其辺に此彼と次へ出



幸國神社

鳥井寺の西岡村あり今春日と祇社の北下幸國の地あり延喜式に志紀郡一載あり之も此丹南郡の内あり

三代實錄云貞觀九年二月廿六日丙申以河内國志紀郡幸國神預官社

小山名産團扇

鳥井寺の軌の方より此地志紀郡小属大坂より鳥井寺に至る街道也此團扇他家不類あく富村小唯一家其製一子相傳といふ柄丸竹の方より多くなりて花春あり平直なり柄と多し其子より傳るは是と如く高貴

五雜組云太明以前無摺扇多用團扇

三才圖會云團扇可以遮面南方女人皆用團扇惟妓女用摺扇多

按團扇ハ翳似て圓く方扇ハ俗小唐うちりり号る品より方なり

和訓義解云宇知波ハ打ちつづの略ありと

南命山無量壽院善光寺

小山村あり

本尊一光之尊阿弥陀如来

信州善光寺一體分身尊像

傳云當寺本尊ハ往昔人王二十四代推古天皇の御宇本田善光難波の堀江に於て如来の尊像と感得一木國信濃に皈折此地の旅館に宿る其時より隆聖法師とて聖つて草庵に住り斯に聞より急來つて如来と拜し

信心のゆかり此尊像と此里小安置奉らんると然も善光が心仕

以所あり唯如来の御心小随い奉らんると有無の應答もとり法師終

夜尊像の事と慕い奉らんると如来も是に感應し給ひや翌朝拜奉れ忽

然として一體分身給ひ何をもつれ分るも分身尊容雙を給つと思後

あり隆聖より尊信一其一体と此地に安し其由縁小依て寺号も同トク

善光寺と稱奉らんると往古堂舎窺はるるも後世大に廢以元慶長年間

再建のりりも今後許多の星霜と経る今僅の廢寺と成るも聞也

三好城址

小山津堂西村の間にあり三好善繼が從弟三好山城守康重入道笑岩元龜年間あり籠る天正元年織田信長若江の城を圍むの時當城の押して織田上野介信包備川左近

三好畧傳

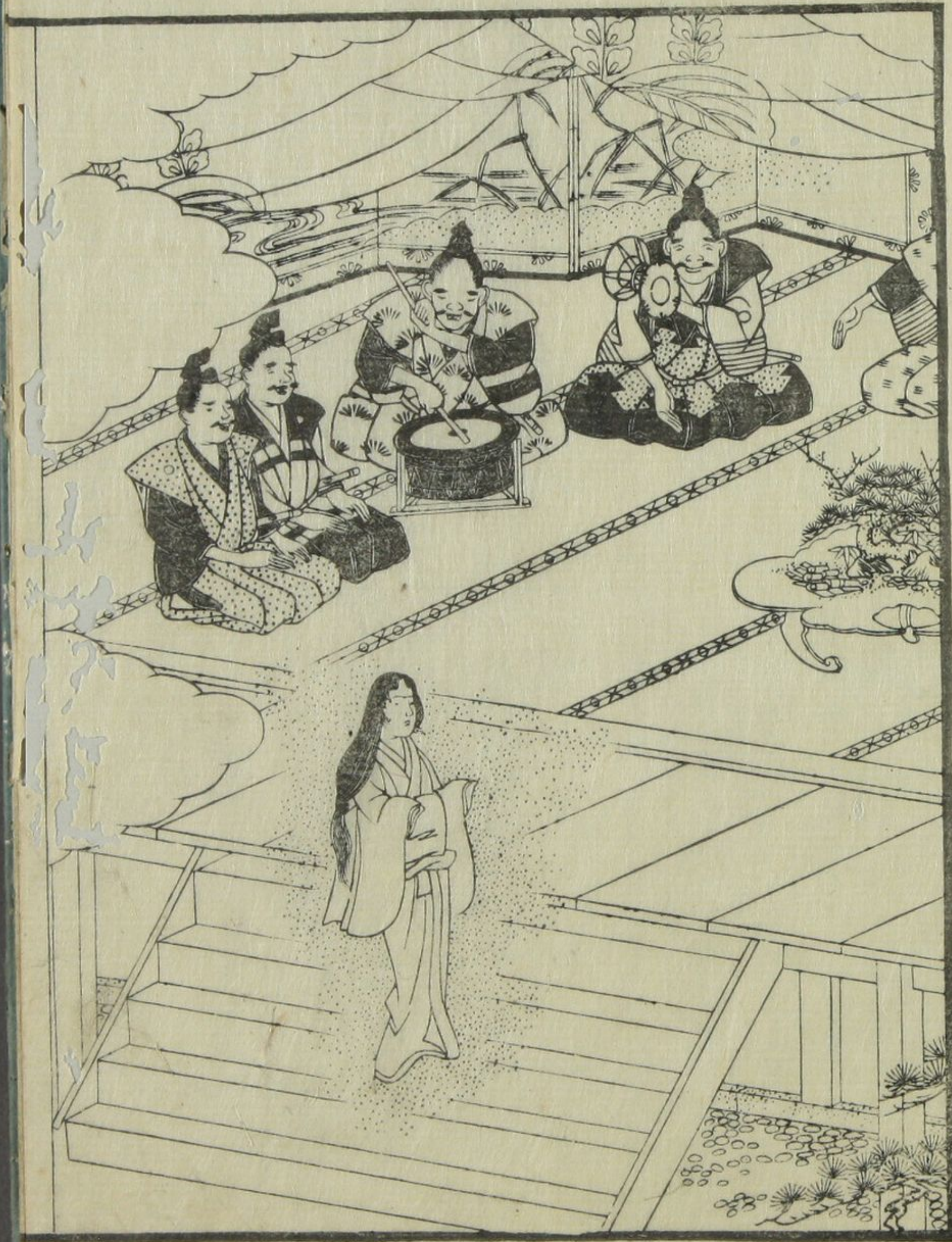
天正元年十月三好左京大夫義繼河州若江の城に於て自殺し行年二十九歳

右三好家清和源氏新羅二郎義光の苗裔として小笠原次郎長清次男阿

波守長房國の守護とあり其子阿波守義長より八代の孫信濃守長之阿州

三好郡に住み依て氏に其子三好筑前守長輝細河氏の陪臣とあり長輝が







次男筑前守長基其長子修理太皇太后之執權とるれり文治長房阿州  
二好住二好住以来十四代二百九十余年して亡り

小山の城小籠る二好山城守康重入道笑岩左京兆義継が從弟あるが武道乃暇  
和歌と嗜連歌と好或猿樂の謡曲と衆とせしむる仲秋の頃猿樂と集

り謡曲と奏せしり躬も富士太鼓と撞ひ黄昏の事ある小十七八歳ある客見妙  
る美女忽然として来り殿の階と二段のより慨然として時落り山城と度

唱く消失の笑岩も心樂し八月同九月二日連歌と興行せしれり笑岩のより  
茅花茅花よまらるる芦の一村と云古俗の浅さかこより野とありて二つだけ

らましが織とありて今年二好の嫡家義継亡びて笑岩も世間とてとん  
ト果て数面の従士と暇と遣り城と捨て髪髪と切り名と笑と改め達磨

宗一飯依洛西の妙心寺不寓居し世味と忘り無一物の身なり天正九  
年辛巳八月十五日小泉刈塚の津の寓舎して行年五十八とて病死せり

右ハ和州緒將軍傳に見たり然らず和泉名所因會塚妙國寺の條下に二好之康の舎弟安宅水  
攝津守冬康當寺に於て連哥と催は時前より古俗の浅さこより野とありてトありり

志疑神社

二好の一族して連哥の趣意も粗似たり其死ありて尚考之  
大井村小あり今天王と稱ひ此地の生土神なり  
延喜式神名帳出志紀郡十四坐の其一なり

伴林氏神社

林村のより延喜式出右と同  
三代實錄云貞觀九年二月廿六日以河内國志紀郡林氏神預官社

黒田神社

北條村小あり今天神と稱ひ此地の生土神なり  
延喜式神名帳出右と同

允恭天皇陵

國府村のより惠我長野北陵号以善田八幡宮より五丁北に當る  
陵の畔小塚十二のり内二道明寺七八尺田其餘古室木の隣村の管内あり山形南北へ  
長く頂と南の方一段高山周凡二百十余間四面池の埋りれり趾あり

前王廟陵紀曰惠我長野北陵遠飛鳥御宇允恭天皇在河内國

志紀郡兆域東西二町南北二町陵戸一烟守戸四烟延喜緒陵式  
或曰今在國府市野山陵戸其山陵の真なり守戸山陵の守ありト云

日本紀云 雄朝津間稚子宿禰天皇允瑞齒別天皇正同母弟  
也治世四十二年新羅王調船八十艘及種々樂人八十貢上  
聞天皇崩到筑紫大哭泊于難波津皆着素服捧御調且張種  
々樂器自難波至于京或哭泣或歌舞參會於殯宮也四十二  
年冬十月葬天皇於河内國守原坂



孝女衣縫氏墓

国府村衣縫子律也  
十四代 仁明天皇 永和 年 正月 衣縫の造金継しつる人の女として又母に孝なりし  
よりて初〜〜位と賜て家宅の租を免しつる事

日本通紀曰 永和八年春正月河内孝子免戸内租

傳云右京人衣縫の造金継の女河内志紀郡に居佳し年十二歳〜〜又と失ひ泣返  
る人ふ過〜〜服圖〜〜後母他に嫁せん〜〜許し女竊ふ家成出て父の墓〜〜  
任〜〜且々哀慟〜〜是嫁事と疑〜〜故あま母復ひ嫁事と謂ひ故家〜〜  
ア〜〜紡績の勤め怠〜〜衣食〜〜供して母〜〜事〜〜至孝〜〜又雜材と買〜〜  
惠賀河に備橋と作りて行人と助〜〜其上深〜〜佛法と信〜〜愍〜〜十五年に  
て母八十〜〜死ひ又母の墓の傍に居て立て墳墓と守り哀色絶ひ  
帝あれと歎感〜〜初〜〜位と賜て家宅の租を免しつる事

舟橋水仙

通明寺の北舟橋村にありて下り水仙と作〜〜名産〜〜此地へ他所〜〜  
〜〜古御あり〜〜高貴の宮〜〜初咳のり〜〜献〜〜開

本草綱目水仙宜卑濕地不可飲水故名之

西國三十三所名所圖會卷之四終



